

藝術立国之碑

宇宙の神社に平伏せ

地球の偉大さに畏れを抱け

生きとし生きる命を愛し尊べ

文明哲学研究所
設立の宣言

―核廃絶と世界平和のために―

「藝術立国」を建学理念とし平和を希求する我が大学は、
人類存亡の淵に立つ今このとき、
人間の良心を基調とする新たな文明の創造をめざし、
文明哲学研究所の設立を決意した。

宇宙の神秘に平伏せ

地球の偉大さに畏れを抱け

生きとし生きる命を愛し尊べ

人間とは何か。

文明とは何か。

人間と文明との関係はいかなるものか。

人類史は、文明の興亡盛衰の歴史であった。

地球上に人類が誕生して以来、いくつもの文明が生まれ、

隆盛を極めては衰退滅亡し、

その繰り返し繰り返しの果てに、今日の現代文明に至った。

—どの文明においても、

滅亡の基本的な原因は社会の内部からの崩壊現象であり、

外部からの侵略だけで崩壊した文明は本質的に一つもない――

諸文明の興亡盛衰をつぶさに研究したアーノルド・トインビーは、歴史の教訓として、そう喝破した。

いかなる文明もいつか崩壊する。

廃墟となり砂漠と化した過去の文明の痕跡は、

永遠不滅の文明は存在しないことを教えている。

有史以来、人類は自らの生への欲望を達成するために、

ひたすら便利さと効率を求め、

生きとし生きる生命を奪い、地球を破壊し、

いつしか、それが文明であると信じるようになった。

人類史を通じて、

今日ほど多くの人間が、かくも裕福に暮らした時代はない。

しかしその陰で、これほど多くの人間が地獄の苦しみに喘いでいる時代もない。

貧困に苦しむ十億人を超える人々、

飢餓で死んでいく数多くの子どもたち、

果てしなく続く戦争と殺戮、

地球上の生物種を刻々と絶滅に追いやる自然破壊。

なかんづく、

現代文明が生み出した最大の悪魔である核。

この核こそ、文明最大の矛盾である。

現代文明の基軸をなす最先端の科学技術の所産でありながら、

その科学技術をもってしても制御不可能な核。

その廃絶なくして、新たな文明への道は拓けない。

文明の闇と光。

人類が一万年をかけてたどり着いたその姿を省みて、

文明とは、善であったのか、それとも悪であったのか。

幸せと平和をひたすら追い求めながら、
自らの欲望に翻弄される宿命を負った人間。

美と真実に憧れながら、

自己保存のためには他の生命を抹殺することも厭わない人間。

善と悪の狭間で絶えず揺れ動く人間。

我々は、この人間存在の矛盾を直視し、

自己中心的な欲望や傲慢と対決しなければならない。

文明とは何か――

この根源的な問いのもとに、いま我々は、新たな闘いを開始する。

人類存亡の淵に立つ今このとき、

欲望に支配された文明の潮流を断ち切り、

新たな文明の創造に向かわなければならない。

闘いの武器は、人間の良心である。

文明に対する徹底した自己反省と、

何よりも、人間だけに備わっている良心の復活、
それこそが、新たな文明哲学の出発点である。

いまここに、文明哲学研究所を設立し、

アジア全域の志ある人々、さらには

平和を希求する全世界の人々と堅く連帯し、

人間の良心を基調とする新たな文明の創造に立ち向かうことを誓う。

二〇一二年十月

一

第6回

平和文明会議

会議録

生命誌から見る文明 —生きものの視点—

参加者（敬称略・順不同）

中村桂子（基調講演者）

豊崎博光

小松正明

奥本京子

尾池和夫

秋山豊寛

ヤノベケンジ

井原甲二（座長代行）

井原 第六回平和文明会議を開催したいと思えます。本日は、座長の松本健一先生が体調不良でご欠席のため、座長代行として私が司会を務めさせていただきます。

本日のテーマは「生命誌から見る文明―生きものの視点」です。人類は、これまでエネルギー革命を契機に新しい文明に移行してきました。そして、現代文明もまた、化石エネルギーから核エネルギーへと推移しようとしています。果たしてそのことを生命の側では本質的に受け入れることができるのだろうか、ということを考えていきたいと思えます。

今日は、お二人の基調講演を予定しておりましたが、大石芳野先生が体調不良でご欠席のため、「生命誌」という言葉の生みの親であり、J T生命誌研究館館長を務めておられます中村桂子先生に「異なる道を求めて―生命誌」という演題で基調講演をいただきます。その後、ディスカッションに入り、議論を深めていきたいと思えます。

それでは、中村先生、よろしくお願いいたします。

異なる道を求めて―生命誌

講演

中村桂子（なかむら・けいこ）

（J T 生命誌研究館館長、文明哲学研究所客員教授）



❖ 人間は自然の一部である

東日本大震災の発生を契機として、日本中の人びとが自然、原発、これからの社会と様々なことに思いを巡らせたのではないかと思います。

震災当時、若者たちは瓦礫などの撤去作業にボランティアとして参加し、歌手は歌を歌い、サッカー選手は子どもたちと一緒にボールを蹴ることで、みんなを元氣付けていました。さて、私は何ができるだろう? と思ったとき、科学者が現場にのこのこ出て行っても何の役にも立たない。歳も歳ですし、結局は邪魔なだけだということに思い至りました。今、この瞬間に苦しんでいる人を助けることができない私が生きている意味はどこにあるのだろうか? と、本当に考え込みました。そこで、自分なりに出した答えは、生きもののことを考え続けるしかないということでした。今すぐ何かの役に立つわけではないけれど、長期的に考えれば、それは意味のあることだと、自分に言い聞かせて、以来、暮らしております。

その中で書いたのが、『科学者が人間であること』（岩波新書）で

す。どうしても書かねばならないと思つて書くことがあまりない怠け者ですが、こればかりはその時の気持ちをどうしても書きたいと思ひました。

私が考へているのは至極当たり前のこと、人間が生きものだということです。そして、人間は自然の一部であるということです。こんなことは三歳の子どもでさえ知つており、皆さんの前で申し上げるほどのことではない当たり前のことです。ただ、現代社会が、人間は生きもので自然の一部である、という認識のもとで成り立っているかといへば、そうではないと思ひます。

私が人間は生きもので自然の一部であると言ふ時には、「生命誌」という知を基にしており、それを描いたのがこの「生命誌絵巻」です（図1）。扇の天が現在を表し、そこにはバクテリア、ヒマワリ、イモリなど、人間も含めてさまざまな生きものが存在します。

生物の教科書には、約百七十万種存在しているとあります。これだけでなく多様と感ぜますが、熱帯の調査がなされていません。一九八〇年代、アマゾン流域で、一本の木にいる虫たちを調べ、その調査に世界の生物学者の協力を求めたところ、既知のものは三%、つま

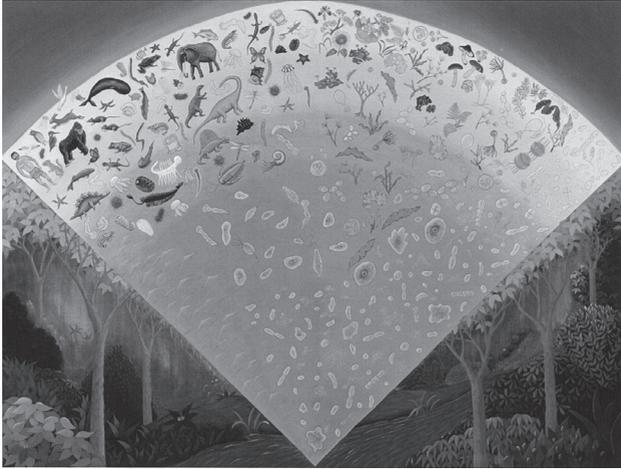


図1

り九七%が未知だったのです。以後、熱帯での研究が進んではいますが、未知の生きものは多く、地球上には数千万種の生きものがいるだろうと考えられています。今日申し上げたいことの一つは、自然については、まだ知らないことだらけだということです。生きものの種数さえ分からないもつとも非常に多様であるということは確かな事実です。生物界が多様であるということは、縄文時代の人も知っていたでしょう。私たちよりもむしろ、彼らの方がよく知っていたと思うのです。二十

世紀にはっきりさせた大事なことは、こんなにさまざまな生きものが存在するけれども、それらは全て細胞からできており、細胞の中にはDNAが入っているということです。この事実と進化とを合わせて考えると、生きものの祖先は一つと考えられます。

DNAを持つ細胞が、いつ、どのようにして現れたのかはまだ分かりませんが、少なくとも三十八億年前の海の中には存在したことが分かっています。そこで、「生命誌絵巻」の扇の要（かなめ）は三十八億年前、地球上の生きものはその時にいた祖先細胞から生まれてきたということを示しています。実は、生きものを描く時、バクテリアを一番下に置いて、だんだん高等になる過程を描くのですが、絵巻は天から要までの距離は全部同じで、生きものは皆三十八億年の歴史を持つことを示しています。腸内バクテリアもヒマワリも三十八億年の歴史を中に抱えているのです。もちろん人間も。アリなどひよいと潰しがちですが、三十八億年の歴史を思うと軽々しくはできません。

しかし、現代社会は、この当たり前のことを認識していないと感じます。「3・11」の際、原発事故を「想定外」と捉えた方々は、人

間はこの扇の外に存在し、自然をコントロールできると考えているのです。これからは、自然の一部として人間は存在し、三十八億年の歴史を他の生きものと共有しているのだということを前提にした社会を組み立てなければなりません。申し上げたいことはこれに尽きます。

最近はずがに聞かなくなりましたが、一時期流行った言葉に「地球にやさしく」というものがありました。しかし、「地球にやさしく」と言う時は、扇の外側にいます。自らが自然の一部であると認識し、生きものの視点に立っていけば、「地球にやさしくしていただく」ということになるのではないのでしょうか。現代は科学技術文明社会であり、金融資本主義社会です。進歩と成長を基礎とした社会です。アベノミクスは成長を目指し、科学技術による進歩を求めています。これが今日の社会の大事な価値観なのです。

生物学では、裸の状態の間を ” ヒト “ と呼びます。自然の一部であり、命を持つ存在です。このヒトが人間として、金融市場原理と科学技術による成長と進歩を推し進め、その一つの結果として自然破壊を引き起こしています。最近の豪雨なども、科学的根拠はあ

りませんが、人間の活動が自然に何らかの影響を与えた結果なのではないかと思うのです。

❖ 生きものの持つ、三十八億年の継続のシステムに学ぶ

これまで述べてきたように、私たちも自然です。つまり、内なる自然“がある。それは私たちの心と身体です。環境破壊など、外の自然を壊す行為は、私たちの内なる自然をも壊すはずです。うつになる、アレルギーが増えるなど、いろいろな形で表面化し始めていると感じます。心とは何かについて話すのは難しいですが、生命誌としては時間と関係に注目します。私たちは三十八億年という長い時間と関係を持って生きており、それが断たれると、体も心も壊れると考えてよいと思います。効率ばかりが主張され、時間を切り、人と人との関係、自然との関係が切られることで、体も心もバランスを保つことができなくなっています。それは、内なる自然を破壊していることに他なりません。

地震、津波、豪雨など、自然による人間社会の破壊もあります。そ

して、「3・11」の時は、科学技術の象徴である原子力発電所が稼働していたために、自然による破壊が増幅され、さらに大きな破壊に繋がりました。今、私たちの社会の価値である成長と進歩は、外の自然、そして我々の内なる自然を破壊し、さらにその破壊を増幅させています。生きものは、これまで三十八億年もの間続いてきたのですから、私たちが何をしようと大丈夫です。続いていきます。しかし、人間はどうでしょうか。自然破壊と内なる自然の破壊が進むにつれて、生きにくい時代になります。子どもや孫の時代、さらには千年先を考えた時に、人間はこのままでいいのだろうかと思えます。この先も人間が存在し続けようとするならば、生きものの持つ三十八億年の継続のシステムから学ぶことに十分の価値があると思えます。

金融資本主義と科学技術文明は成長と進歩を目指すものですが、そもそも、生きものは成長し続けるということはありません。生まれたら、育ち、成熟し、老化し、死ぬということを繰り返します。一つのが成熟し、その生を終わると、次に交代するという形で、成熟と交代を繰り返して続いているのです。金融資本主義の成長は、

止め処ない成長を求めています。生きものの視点からは不可能なことを目指していると言わざるを得ません。

生きものは進化しています。日本語の進化には進むという文字があるのです、進歩と同じように考えられますが、全く違います。進歩は、一つの価値観に基づいて、こちらは進んでいるから先進国、こちらは遅れているから開発途上国と線を引きます。そして、遅れている方にはこちらへ進歩してきなさいと言うわけです。しかし、生きものは、アリもライオンも結構と、様々な生きものの存在を全て受け入れて多様化してきたわけです。どこにも上下関係は存在せず、指図する者もない。進化と進歩は違います。

進化は、多様な生きものの世界を形づくり、どのような状況下でも何か残るものがあるという状況を作ってきました。つまり、目的に応じた結果が、目的とは無関係に存在しているのです。ある目的に向かっていくのではなく、目的に合ったものが選ばれるのです。寒い時はこちらが生き延びる、乾燥した時はこちらというように生き残ります。生きものの世界は、常に変化するなど多くのダイナミズムを持っており、私はこれを生命のストラテジー、生きる戦略と呼

矛盾にみちたダイナミズム (生命のストラテジー)

- ・ 普遍
- ・ 安定
- ・ 精密
- ・ 合理性
- ・ プログラム
- ・ 正常
- ・ 必然

- 多様
- 変化
- 遊び (調節)
- ムダ
- 現場対応
- 異常
- 偶然

図 2

びました。この戦略は、実は矛盾が生み出しているのです。今の社会はとにかく矛盾を消そうと躍起になっているように見えます。一方、生きものは矛盾の塊です。生きもの矛盾がなくなった時は、死んだ時です。つまり、矛盾なしでは生きていられないということです。自分の行動を考えたら、矛盾の塊であることはよく分かります(図2)。例えば、すべての生きものはDNAを持ち、細胞からできているという、これ以上ない普遍性を持ちながら、多様です。また、DNAはとても安定で

ありながら、変化します。さらに、DNAに情報がプログラムされていながら、同時に細胞は現場対応で活動します。このようなシステムだからこそ続いてきたのだと思います。

三十八億年続いてきた生きものの視点から、成長と進歩という価値観を持ち、矛盾を消そうとする現代社会は、生きものにとっては大変生きにくい社会であることが分かります。私たちはこのような考え方、価値観を変えるところに来ているのだと思います。ただ、考え方を変えることが、実は一番難しい。しかし、私たちの歴史には、考え方を変えた時が存在します。その一つとして、今参考にしたいと思うのがルネサンス（人間復興）です。

◆ 「生きものとしての人間」の解放

ルネサンスに関しては、様々な考え方があり、開始時期も諸説あります。イタリアのルネサンス、フランスのルネサンスと地域による違いもあります。私が今参考にしたいのは塩野七生さんの説です。同氏の『ルネサンスとは何であったのか』（新潮社）を参考にしなが

らお話しします。

塩野さんは、十二世紀頃からルネサンスは始まったとされています。ルネサンスとは、神からの人間の解放を指しますが、実際には、神からというよりは、神を利用して大きな権威、権力を振るっていた教会からの解放を意味していました。ここでのキーパーソンは聖フランチェスコ（アッシジのフランチェスコ、一一八二―一二二六）とフリードリッヒ二世（一一九四―一二五〇）です。この時代、教会は「神がこのようにおっしゃっているのだから、こうしなさい」と大衆に説教をして、彼らの考え方や行動を抑えていました。そして、この説教や聖書がラテン語であったため、人々はその意味するところがわかりませんでした。つまり、教会の権威を借りた聖職者が言うことに、大衆はただ従うしかなかったのです。そこで、フランチェスコは、大衆が内容を理解し、自ら考えられるようにするため、イタリア語で聖書の教えを説いたのです。情報を基本からみんなのものにしたのです。

イタリア語には、宗教に対する人間の態度を三つに分ける言葉があります。信仰者である「クレデント」、無神論者の「アテオ」、神の

存在は否定しないが、全てのことが神任せであってはならないとする「ライコ」の三つです。フリードリッヒ二世や政治思想家のマキヤベリ、地動説を唱えたガリレイなどはライコだったと言われます。彼らは、宗教は必要だけれども、宗教が関与する分野と、すべきでない分野があるという考えを大衆に広めました。その結果、みんなが情報を共有し、何でも神任せではない考え方になり、「なぜ」と問い、自ら考える人になっていきました。それまでは良いことは神様のおかげ、悪いことはみんな悪魔のせいとしていましたが、善・悪を自らの中に引き受ける人になったのです。その結果、人間は精神的に強い人になった、それがルネサンスだったと塩野さんは言います（図3）。

このときのルネサンスが、教会の権威からの脱却、宗教の相対化、情報の共有を行ない、それらが神から解放された人間をつくり、精神的に強くしたように、私は今、科学技術万能主義からの脱却、科学技術の相対化、情報の共有によって、生きものとしての人間を解放するという第二のルネサンスができるのではないかと考えています（図4）。あの時代でできたことが、今、私たちにできないはずは

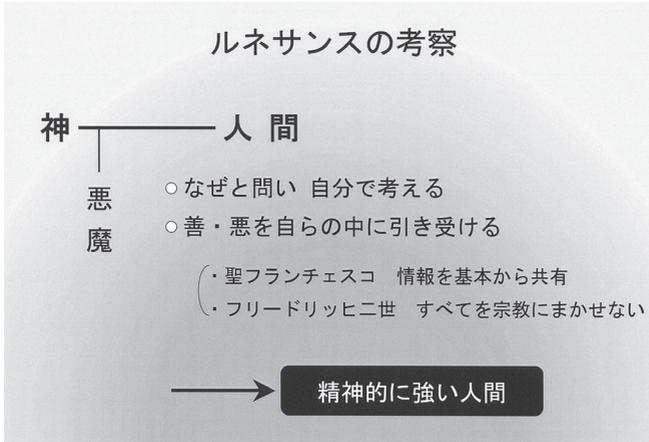


図 3

人間復興

第一のルネサンス	第二のルネサンス
教会の権威からの脱却	科学技術万能からの脱却
宗教の相対化 情報の共有	科学技術の相対化 情報の共有
神から解放された人間	生きものとしての人間

図 4

ないだろうと思います。
ルネサンス期を通じて生まれたのがシエンツァ (Scienza)、つまり、

サイエンス (Science) でした。今は「科学」と訳されてしまいが、本来の意味は「知」であり、「理解」であった。そして、その理解の本質は「表現」であり、「創造」であるとされています。高校の歴史の授業で習い、今、ルネサンスと聞いて思い浮かべるのは、まずレオナルド・ダヴィンチやミケランジェロ、ラファエロなどの芸術家です。それから、ダンテの『神曲』など、多くの絵画や小説などがルネサンス期に排出されました。とにかくルネサンスと言うと文芸、芸術を思い浮かべます。表現し、創造することが理解の本質であるという考えに納得します。私たちも知や理解の本質を踏まえ、て行動したいと思えます。

ルネサンス期の作品と並べるのは恐れ多いのですが、私が生命誌の中で『ゼロ弾きのゴースト』(*)を制作したのは、表現や創造によって本質を考えたいからです。「生命誌絵巻」もその一つです。「生命誌絵巻」は生きものの展開を描きましたが、生命誌研究館の十年目に和田誠さんに描いていただいた「新生命誌絵巻」では、三十八億年の地球の動きも盛り込みました。ここでは生物の絶滅も表現しています(図5・真ん中の図)。人間について考え、人間を解



人形劇『ゼロ弾きのゴースト』
JT生命誌研究館二十周年を記念して上演された、生命誌の視点から宮沢賢治の『ゼロ弾きのゴースト』を読み解いた人形劇。「自然の一部である生きものとして生きよう」というメッセージを伝える。舞台演出・美術・人形遣いを、チェコを拠点に活躍する現代人形劇パフォーマーの沢則行氏が担当。また、本学のヤノベケンジ教授がディレクターを務める、京都造形芸術大学ウルトラ・ファクトリー及び本学学生が人形製作を担当した。

〈生命誌三つの表現〉



図 5

放し、本質を考えようとするならば、表現や創造が不可欠です。そのような行為を通じて、成長と進歩に価値を置く、現代社会の世界観を問い直し、新しい世界観を組み立てたいと思っています。

大森庄蔵先生が、「元来世界観というものは単なる学問的認識ではない。学問的認識を含んだの全生活的なものである。自然をどう見るかにとどまらず、人間生活をどう見るか、そしてどう生活し行動するかを含んでワンセットになっているものである。そこには宗教、道徳、政治、商売、

性、教育、司法、儀式、習俗、スポーツ、と人間生活のあらゆる面が含まれている」（『知の構造とその呪縛』、大森荘蔵、筑摩書房）とおっしゃっています。このような考え方で世界観を組み立てようと考えるとき、今必要なのは「生命論的世界観」であると思っています。

◆ 機械論的世界観からの脱却

現代社会は、科学技術文明と金融資本主義によって、自然破壊を引き起こし、生きものも人間も壊れるという社会になってしまっている、と先ほどお話ししました。ここからは、その科学技術文明について見ていきます。

現代の世界観は、十七世紀に生まれ、科学技術の基礎となった近代科学が持つ機械論的世界観です。科学史家の伊東俊太郎先生によると、ガリレイ、ベーコン、デカルト、ニュートンの思想が機械論的世界観の基礎を形成したということです（図6）。その時代まで、人々は聖書を読み、世界観を形づくっていました。そこにガリレイが登場し、自然は数学で書かれた書物であると言い、ベーコン

機械論的世界観(17世紀)

ガリレイ	自然は数学で書かれた書物
ベーコン	自然の操作的支配
デカルト	機械論的非人間化
ニュートン	粒子論的機械論

(「近代科学の源流」伊東俊太郎による)

図 6

が、その自然は、操作し支配できると言いました。さらにはデカルトが心身二元論によって、人体は機械であると言ったわけです。ニュートンはそれを具体的に解き、細かく分析することで、世界が理解できると考えた。このような流れの中で徐々に自然を操作し、支配するという機械論的世界観が形成されていきました。もちろん、彼らがいなければ、今の私たちの社会は築けなかったわけです。この時期にこのような世界観を持った彼らは、非常に優れた人たちです。しかし、この時形成

された機械論的世界観に何の疑いも持たずに人間は活動してきた今、多くの問題が生じたことは確かです。

大森先生は、「この全生活的世界観に根本的な変革をもたらしたのが近代科学であつたと思われるのである。近代科学によって、特に人間観と自然観がガラリと変わり、それが人間生活のすべてに及んだのである。……現代文明の変革を云々するときにはわれわれが感じているのは、その最も長期的な波ではないかと私には思われる」(同、大森)と言われます。ここでの長期的な波とは、十七世紀から三百年以上続いているものことです。コンピュータの開発による社会の急激な変化などが気になりますが、実はガリレイ以降の世界観が今日まで続いていることに注目する必要があります。

さらに大森先生は、「……こういう最も目の粗い縮尺で見ると、東洋と西洋という対立は消えてしまう。……洋の東西を問わずに、近代科学以前の世界観と近代科学に基礎づけられている近代的な世界観とのコントラストである」(同、大森)と言い、機械論的世界観で分析・還元で数式化すればすべてが分かるという考え方の見直しを示されています。

私たちは中学校で、物体が坂を下りる際に重力がかかる、という例題などからニュートンの力学を学びます。その際に、「この坂には摩擦がないものとする」という条件が必ず付け加えられます。つまり、 $F=0$ として習うわけです。中学一年生が分かるのは摩擦のない坂を動く世界なのでしようが、実際には、摩擦のないところなど自然界のどこにも存在しません。ここでも、自然そのものを見るのではなく、機械論的視点、常にモデル化された世界を見るということが教えられます。ただ、モデル化によってこそ、ジェット機が飛ぶようになり、高層ビルを建てられるようになったわけですから、知識としては重要です。しかし、それは本当に自然を見ているとは言えません。人間は自然の一部であるとして自然そのものを見る必要性を感じます。これからはより総合的に、生命論的な世界観をベースにする。つまり、人間が生きものであるということに基づいて世界観を組み立てることになると思います。そもそも生命とは矛盾に満ちたものですから、とても複雑で曖昧なものを相手にすることになります。今の社会から見ると、時間のかかる面倒な過程を経ることになり、非効率だと言われるでしょう。しかし、これから

の社会を真剣に考えるならば、やらざるを得ないことです。

❖ 問いからはじまる「密画と略画の重ね描き」

ここまでは、私が生命誌を実践しながら考えていることです。生きものの研究は今お話したような世界観に基づいて行わねばならないと考え、二十年間実践してきました。その中で、新しい世界観の組み立ては、生きものの研究だけでなく、自然の研究すべてで考えられるものであると思うようになりました。

そこで今は、自然、つまり宇宙、生命体（地球）、人間（生命体）を新しい自然誌として考えたいと思っています（図7）。当初、生命についてだけ、科学ではなく誌で考えていこうと思いましたが、実は宇宙もビックバンから始まって今日に至るわけですから、これもまた誌として考えられます。人間もそうです。そこで、全てを誌で考えたいと思ったのです。

私たちの ” 問い “ は、大きく5 W 1 H に分けられます。科学はこ
の中で、「何が、どうしたの？」と、物の構造と機能を調べる学問で

新しい自然誌			
自然：宇宙・生命体(地球)・人間(生命体)			
誌			
Why	What・How	When・Where	Who
哲学	科学	史	日常
存在驚愕(タウマゼイン)	モノ(構造・機能)	コト(時間・関係)	生活
最終解(一般解) 真・善・美	暫定解(個別解、合理) 普遍(不変) 固定(機械)	暫定解(物語) 普遍(不変)と多様(変) 生成(生命)	問い・行動
○ プラトン、アリストテレス	→ ○ ガリレイ、ベーコン デカルト、ニュートン ○ ダーウィン ○ ボーア、ハイゼンベルク シュレーディンガー	→	
想像力(創造力)			

図7

す。WhatとHowだけを問います。そこにWhatとWhereを加える。そうすることで時間と関係を知り、「いつ、どこで、何が起きたの？ 三十八億年前どうだったの？」という問いを考える、これが”誌”という学問です。幸い、DNA(ゲノム)には、三十八億年の歴史が書き込まれていますので、具体的に時間と関係を追うことができます。残るのはWhyとWhoです。「なぜ？」という問いは、思想。自

然とは？ 生命とは？ という問いです。「誰が」という問いは、研究者がひとりの人間として、生活、日常性を持つということだと考えています。これらの問いを踏まえることで、研究者の人間が浮き出てくると思います。

日常性とは、子どもを育てる、料理をする、花を育てることなど。このような日常は、どのような仕事に携わる人でも持っています。生物学に携わっている私にももちろん日常があります。

DNAを研究して家へ帰ると、子どもが泣いている。DNAでは説明できませんし、DNAを分析して泣いている子どもが泣き止むわけではありません。もちろん、子どももDNAを持っており、泣くこととDNAのはたらきはどこかで繋がっているはず。しかし、ここでは人間として子どもに接することには、答はありません。研究者はこのような日常を踏まえて考えるということを大切にしたいのです。

もう一つの思想性は、難しいことを考えるということではありません。誰もが宇宙はどうなっているのだろうか？ 人間とは何だろうか？ と考えます。このような問いを排除せず、大事にしたいと思

います。WhyとWho、思想性と日常性は人間の中に必ず存在するのであり、これを大事にしたいのです。WhyとWhoを含んだ形での学問を進めたいと思います。例えば、今、自然科学研究機構で、他の星に生命体はいるかという生物学と天文学が関わるプロジェクトが始まりました。これは、二つの学問が結合したのではなく、そこに属する研究者それぞれが同じ問いを持ち、議論して生れたものです。

このように日常性と思想性を含む姿勢を具体化する方法として、大森莊蔵先生が「密画と略画の重ね描き」を提案されています。密画はニュートン以来の詳細な分析で分かる世界です。これは科学が得意です。そして略画は、自分の眼で見、耳で音を聞くなどの日常を意味しています。今の世界観では、密画が進んだ理解であり、略画は遅れているとされています。しかし、そうではなく、一人の人間の中で密画と略画を重ね描きしているのです。密画を描く時も、略画を忘れないことです。そうすることで、機械論的世界観から生命論的世界観への移行が可能なのではないかと思えます。

大森先生は「心ある自然、心的な自然がさまざまに立ち現れる、そ

れが私にここに生きていくということ、そのことに他ならない、こう私は言いたいのである。仮にそう言えたとすれば、私と自然との間に何の境界もない。ただ、私の肉体とそれ以外のものに境界があるだけである。自然のさまざまな立ち現れ、それが従来 of 言葉で私の心と言われるものに他ならないのだから、その意味で、私と自然とは一心同体なのである。こういうのが、我々の祖先が持っていた感性に近いのではないかと私には思われる。そして、この感性は近代科学と少しも矛盾しない。矛盾しないどころか、近代科学の進展に連れ添うべきものなのである。それを迷わしたのが、ガリレイ、デカルトの水先案内だったのである。しかし、我々現代人は生れてからこの方、ずっとこの迷路の中にある。骨の髄までこの迷路が入り込んでいく。それゆえ、我々の祖先が持っていた感性を取り戻すのは一朝一夕にできることではない」とおっしゃっています。機械論的世界観は私たちの生活、思考の隅々まで入り込んでいます。ですから、これを変えていくことは難しい。しかし、先ほどからお話ししているように、生命論的世界観への移行は今必要であり、密画と略画の重ね描きにその可能性があると思ひ、生命誌を進めています。

- 食べもの（農業・水産業）
- 健康（医療）
- 住居（林業）
- 心・知（教育）
- 環境、とくに水



“生きている”を見つめ
“生きる”を考える

図 8

ルネサンスに学ぶ世界観の転換についてお話しましたが、少し具体的なことに入ります。今、私たちは、とにかく自然を見る必要があります。生きているって何だろう？

ということを見つめて、どのように生きたらいいのだろうか？ と考えるわけです。そこから、大事なことは何かが見えてきます。

人間は生きものであるということが当たり前のことであるように、大事なことは何かという問いに対する答えもま

た、当たり前のことです。つまり、食べ物、健康、住まい、心や知、環境、特に水です（図8）。生きる上で不可欠のことです。コンピュータやジェット機、リニアモーターカーなどは大きな進歩かもしれませんが、私たちにとって大事なものは生きるために不可欠のことで、産業で見ると、農業・水産業、医療、林業、教育です。お気付きのように、これらすべてが、今、大きな問題を抱えている分野です。産業としても問題が多い。今の社会が、人間は生きものであるということ的前提とする社会ではないため、その弊害が起きていると言えます。

生きものとしての人間を見つめることから始めたいと考えながら、私に関わっている例を一つご紹介します。

今から十年ほど前、ちょうど小泉内閣の時期です。グローバル化の教育のあり方が議論されました。小学生の教育を考える委員会で英語とコンピュータが最重要であり、コンピュータでは株の操作を学び、経済的観念を身につけさせるという考えが出されました。それに対し、株の操作よりも畑の蕪を育てるほうが大事とつぶやきました。日経新聞の方がそれを書くように言って下さ

り、農水省のOBである福島県喜多方市の白井市長が、教育特区という形で、小学校での農業科を始めてくださいました。農業科は国語、算数、図画といった時間割の中に、農業が含まれています。時期によって、田植えや稲刈りに行くというような形で農業と関わっている小学校はたくさんありますが、ここでは授業科目として農業が入っており、年間三十時間ほどを農業に充てています。先生は農業の専門家ではありませんから、地元のお年寄りが大活躍しています。現在では、全市十七校に農業科があり、講師である地元のお年寄りが百人ほどいらっしやいます。ここで、この授業に参加した子どもたちの作文を紹介します。

三年生の男の子。「ぼくはえだ豆を作りました。……シャワーのよ
うな水やりがとても楽しかったです。えだ豆に『大きくなれよ』と
話しかけました。……農業はさい高です」。最初は、なんで農業なん
かやるんだと言っていた子です。「えだ豆に『大きくなれよ』と話し
かけました」というところが大事です。スーパーマーケットで買う
枝豆は食べ物であり、茹でたらビールのおつまみです。この子にと
ってこの時のえだ豆は生きものなのです。ですから、「大きくなれ

よ」と話しかけているのです。

それから、四年生の子。「学校でとれた野菜を家に持ち帰った時、家族がすごいねと笑顔を返してくれました。……一生けん命育てれば育てるほどおいしい野菜になり、みんなの笑顔が増えるなんて、野菜作りにはすごいパワーがあると思いました」。野菜作りを通じて、家族のつながりを感じています。

喜多方市は福島県です。「原発事故のせいで……せっかく農家の人が苦労して野菜や米を作ったのに出荷停止になったりしたニュースを何回も見ました。……喜多方のお米は安全ですごくおいしいです。……福島県へ来る人が増えるといいなとこの米作りで思いました」。原発事故について先生から教わるよりも、自らの体験から、なぜこんなに安全でおいしいものが売れないのだろうかと考えています。六年生の子は、「私たちが育てたあずきを使って赤飯をつくり一人暮らしのおじいさんやおばあさんにくばりました。泣いて喜んでくれた人もいて……その時のことが心に残りました」。

高齢社会や地域社会など、さまざまな社会問題を道徳という枠の中で教えるとされていますが、この子たちは自然と向き合うことで、

これらのことを学び、人とつながっている、他の生きものもつながっているということを実感しているのです。

文科省の指導要領には、一番大事なことは生きる力を育てることだと書いてあります。ただ、そこに書かれた生きる力の内容は、抽象的な難しい言葉で書かれています。彼らと付き合っていると生きる力とは何かが分かるのです。まずとてもすてきな笑顔ができることです。それから、自ら考えて行動すること。塩野さんが言う、精神的に強い人です。また、交渉能力、表現能力、コミュニケーション能力などがどんどん培われていきます。子どもたちには生きものとしての人間という感覚が養われていると感じます。この授業は、今年で七年目ですが、子どもたちの成長は目覚ましいものがあり、今の社会の価値観とは違う、自然と向き合った新しい価値観、世界観を持つ人間が育つことを期待しています。

経済も技術ももちろん大事です。しかし、まず経済ありきで、そのために科学技術振興、科学技術立国を掲げ、予算を付けるからお金につながる開発をしろと言う社会が、命について真剣に考えているかと問われれば、それは疑わしい。まず、命を根本に据えて、生

基本理念	知の体系	自然とのかかわり	技術の性格
生命 (神話)	創生、全体、関係、多様、日常、 物語(口伝)、五感(六感)	(エンド) [人・自然] アニミズム	狩猟、採集、 農業
理性 ギリシア (プラトン) イデア	全体 <ul style="list-style-type: none"> 自然哲学(統一) — モデル 自然誌(多様性) 	[神・人・自然]	技能
中世 (スコラ・キリスト教) 神	自然哲学(統一性)	[神][人][自然]	技能
近代 (科学) 啓蒙理性	普遍性、論理性、客観性	(エキソ) [人][人工][自然]	機械(時計) 科学技術 自然からの離別
生命 (新しい神話)	普遍性 — 自己創出(自己組織化) — 多様性 階層性 歴史、関係、日常、物語	(エンド) [自然・人・人工]	自然と調和する技術 ヴァーチャル・リアリティ (コンピュータ)

図 9

きる力を持つ人々がその社会に必要な技術を開発し、経済を立てていくという、今の社会の構造とは逆のあり方になることを願います。

自然を „愛づる“ ことで拓く新しい命の時代

この表は、歴史の中での基本理念、自然とのかかわりの変遷を表したものです(図9)。太古の時代は、生命を基本理念としていました。自然とのかかわりもアニミズムを土台として、五感、六感が大事にされ、人と自然が一緒に生き

ていた。狩猟、採集、その後農業を生活の基盤にします。ギリシャ時代に理性が基本理念となり、自然哲学と自然誌が生まれました。この時代、すでに神という概念が出てきていたのですが、ここではまだ、神と人と自然が一体化した存在でした。ところが、中世に入り、先ほどお話したルネサンスもここに含まれますが、スコラ哲学、キリスト教などの考え方によって、神は絶対的な存在とされ、頂点に神が存在し、生きものの中での人間は特別な存在で、自然を支配することができるという思想ができたわけです。その後、理性の中から近代科学が生まれ、神を頂点から追い出し、人間が一番偉くて自然を支配する存在となった。そうすることで人工を止め処なく作り出してきました。そこで、今日の自然破壊などの問題が生まれてきました。

人工を否定はしませんが、これらを全部踏まえたうえで、人間が自然の一部であり、その中で自分が人工を作るのであるという認識を持ち合わせた、一体感を持ったシステムをこれからつくっていくことが必要です。新しい命の時代を生きる時だと思えます。ここで重要な鍵となる「密画と略画の重ね描き」をどのように実践するかを

考える際、参考になる先人として宮沢賢治と南方熊楠がいます。

互いに西洋の学問、特に科学に強い関心を持ち、賢治は日蓮、熊楠は密教ですが日常の中に仏教感を持ち合わせ、自然の中に生きていました。賢治は岩手県、熊楠は和歌山県出身で、共に日本の県の中でも、特に森の面積が広い県の出身です。森という自然が賢治と熊楠の思想に何らかの影響を与えたのかもしれない。

賢治は科学に期待し、人々の生活を改善してくれるものであってほしいと願いながらも、一方で自然の力の大きさを知っていました。『グスコープドリの伝記』などにもその思想は表現されています。また、熊楠は、米国と英国に渡り、自身の意の赴くままに研究生活を送り、まさに日常と研究とが重なり合っていました。「南方曼荼羅」などの表現を通じて、科学を日常の中にある仏教の眼で見ようというだけではなく、仏教も科学に眼を向けることで隆盛すると考え、科学ばかりに頼るのではなく、自然・信仰・文化を大切にしていることを説きました。二人共密画と略画のどちらも大切にしていたのです。重ね描きのお手本になると考えています。研究館の二十周年に生命誌版『ゼロ弾きのゴーシュ』を演じました。東日本大震災後

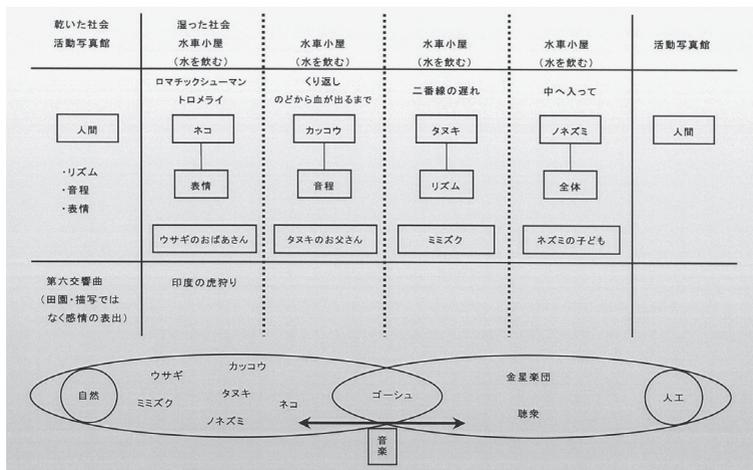


図 10

に改めて読み、賢治の自然と人間の関係の捉え方を示していることに気付きました（図10）。

ゴージュは、活動写真館でセロを弾いています。演奏会でベートーヴェンの交響曲第六番「田園」を弾かなければならないのですが、下手で怒られてばかりでした。しょんぼりして、水車小屋の家に帰ります。帰った時に、彼は必ず水を飲むのですが、この水を飲むという行為は、活動写真館のある社会、つまり、近代社会・乾いた社会から、自然の社会・湿った社会に入っ

ていく儀式ではないかと気付いたのです。猫、カッコウ、タヌキ、野鼠が命の音を教えてくれる。ゴーシュは気が付かないうちに、命の音を身に付け、演奏会で「田園」を弾きます。そしてアンコールを求められる。ゴーシュが自然界で手に入れた命の音が、乾いた世界の人を動かしたということではないかと、読み解きました。自然が語る物語を聞くという賢治の自然との向き合い方が示されています。ゴーシュは水を飲むという行為によって、自然とのつながりを体験しています。現代社会に生きる私たちも、日常の中で様々な形で自然が語ることを聞けるはずで、生命誌は、自然と人工の世界の間に人間を置く考え方です。

日本の文化は、自然との一体感を感じさせるものがたくさんあります。その中でも私が特に大事にしているのが、「愛づる（めづる）」です。千年前の京都に、大納言のお姫様で、蟲愛づる姫君と呼ばれる方がいらっしやいました。少し変わっていて、男の子たちに虫を集めさせては、「おお、可愛い、可愛い」と言う十三歳のお嬢さんです。侍女はそれを見て、「そんなの汚い、捨てなさい」と言うのですが、お姫様は「これがしばらく育って蝶々になってヒラヒラと飛んだら、

みんなきれいなねと言うじゃない」と反論します。でも、そうなった時には、もうはかない命で、本当の生きる力は今ここにある。それを彼女はしっかりと捉えていた。彼女は、本地たづぬる“、つまり本質を見ると表現しています。見かけがきれいとか汚いとかという話ではない、これは素晴らしい生きる力を持っている。そう思えば、なんて可愛いのでしょうか、十三歳のお嬢さんがおっしゃるのです。このお嬢さんはナチュラル思考で、その当時、眉は剃らなくてはいけなかったのですが、ゲジゲジ眉のまま。お歯黒もしない。真っ白い歯で笑っておかしいと書いてあるのですが、真っ黒い歯で笑うほうがよほどおかしい。また、観察するとき長い髪は邪魔になるので、髪を耳にかける。どれも当時の作法としてはとんでもないことなのですが、考えてみたら、とても合理的でナチュラリストです。そういうお嬢様がちょうど紫式部と同じ頃の京都にいらっしやった。

先ほどのガリレイ、デカルトなどは十七世紀の人ですが、このお嬢様は十一世紀に生きていた人です。つまり、ガリレイから六百年も前の日本に、そういう形で自然をきちんと見るとい文化があったのです。それは分析という方向ではなく、”愛づる“というところへ

向かった。この「愛づる」は Love ではなく、Philia、つまり知的な愛だと思えます。本質をよく理解したうえで愛です。十一世紀にこの国にもこのレベルの物語はありません。もちろん、このお姫様は DNA などご存じなかったのですが、考えていることは同じだと思います。ちなみに、宮崎駿さんの「風の谷のナウシカ」のモデルはこのお姫様です。先ほどお話しした農業の授業では、子どもたちが農業を通じて、自然に親しみ、自然の本質を知り、それを愛すること成長しています。まさに「愛づる」です。アメリカの真似をして、経済成長を目指し、軍備を整えることを考えるのではなく、賢治や熊楠、蟲愛づる姫君に象徴される文化や思想から日本人的な自然観を学び、これを世界に発信していきたいと思えます。それを通じて、誰もが生き生きと暮らす新しい命の時代に向かうことができると思えます。

井原 中村先生、ありがとうございました。

ディスカッション



井原 それでは、デイスカッションを始めたいと思います。

基調講演を通じて、人間は生きものであり、自然の一部であるという生命誌を貫く思想を中村先生から伺いました。中でも、「愛づる」という言葉は、Philia、知的な愛であるという部分が印象的でした。これはまことに慧眼です。「生命誌」は、その内に哲学をも含む「生命誌哲学」であると言えるのではないかと感じました。生命誌の視点から物事を見る必要性、タウマゼイン（存在への驚愕）（*）、つまり、ここにいることへの驚きに気が付くことの必要性を強く感じます。

それでは、まず尾池先生、お願いいたします。

尾池 全てのものが同じ三十八億年の歴史を内包しているとおっしゃいましたが、本当に「全てのものが」と言い切ることができるのでしょうか。例えば、地球の他にも、同じような生きものがある星があるかもしれないということもおっしゃった。もしいるとすれば、別の歴史を持っていると思うのです。あるいは、もしかしたら地球上でも、ひょっとしたら全てのものが同じ三十八億年の歴史を共有

タウマゼイン（存在への驚愕）

「驚き」「驚異」「驚愕」などの意味を持つギリシア語。この地球という星があり、そこに人が生きてあり、森羅万象が在ることの《在りえなさ》の覚醒、驚きを指す。詳しくは、「生きている」を考える（中村桂子、二〇一〇年、NTT出版株式会社）、『現代思想としてのギリシア哲学』（古東哲明、二〇〇五年、筑摩書房）等を参照。

しているわけではないかもしれない。アフリカにいる生きものは同じだが、南極のものは違ふとか……。その点、いかがお考えでしょうか。

中村 現在の生きものたちのDNAのコドン（遺伝暗号の単位）（*）は、どの生きものを見ても同じです。それが偶然に起きたとは考えにくいので、地球上の生きものが同じ三十八億年の歴史を持っているとは言えると思うのです。

尾池 しかし、百三十数万種の生きものがいて、その中の数%しか調査できていない状況です。そういった中で、なぜ全てが同じ歴史を持つと言うことができるのかという疑問があるのです。

中村 バクテリアから人間までさまざまな種類の生きもののがコドンは共通です。また人間の遺伝子をハエに移せばそこで働きます。生きものは全て三十八億年の歴史を持っているということですが。ただ、科学は、「いる」ということは言えるけれども、「いない」というこ

コドン（遺伝暗号の単位）
DNA上の塩基（アデニン、チミン、グアニン、シトシンの四種類）は、三つの並びでひとかたまりとなり、一種類のアミノ酸を意味する。この塩基三つの暗号を「コドン」といい、コドンの並び順によってアミノ酸の結合順序が決定される。詳しくは、『生きている』を考える』（中村桂子、二〇一〇年、NTT出版株式会社）、『別冊Newton やさしくわかる生命の科学』（ニュートンプレス、二〇一四年、株式会社ニュートンプレス）等を参照。

とは言えないということに注意する必要があります。今まで発見された生きものとは全く異なる生きものがどこにもいない、ということとは言えません。

「ない」ということで面白いのはゲノム（*）です。ヒトのゲノムはA、T、G、Cが三十二億並んでおり、これは解析されました。つまり、この中に入らないものは、人間は持っていないと言えます。科学の歴史の中で、「ない」ということが言えるのは、これだけです。それはそれとして、尾池先生がおっしゃったような意味での「ない」は言えません。

尾池 すると、普通の科学的な意味でおっしゃっているという意味で理解すればよいのでしょうか。例えば、現在、とても深い場所にある岩石の中に生きものが発見されていますが、そのような場所には全く別の歴史を歩んできたものがひょっとしたらいるのではないかと思っています。

中村 そうですね、現在、そのような場所の生きものの調査が行わ

ゲノム

生きものの体は細胞でできており、一つの細胞に入っているすべてのDNAを総称してゲノムと言う。ヒトの体は六十兆個の細胞から成り、一つ一つの細胞に存在するゲノムは細胞に命令を出す役割を担っている。詳しくは、『生きていく』を参考。

（中村桂子、二〇一〇年、NTT出版株式会社）、『あなたのなかのDNA』（中村桂子、一九九四年、早川書房）等を参照。

れていますが、今のところ、例外なく全て同じ歴史を共有しています。

尾池 分かりました。

中村 今まで様々な環境の中で調査を行い、現状では、例外は全く同じということは言えます。しかし、今後の調査の結果で、別の歴史を持つ生きものが発見されないということは言えません。

尾池 生物学そのものが「学」として成り立っていないと言っている生物学者がいます。「学」と言うからには宇宙全体の生物を全部把握した上で「学」が成り立つのであって、今は地球上にいる生物のほんの一握りを見ているだけだから、「学」とはとても言えないと言っています。それとはまた別の問題だとは思いますが、どれだけのものを調査すれば、このような結果が導き出せるということがはっきりしていれば安心感があるので、それだけ確かめたかったです。

中村 物理学の場合は、ニュートンにしる、アインシュタインにし

ろ、地球上で起きていることも、宇宙の遠い星で起きていることも同じとされます。それに対して、生物学は今のところ地球だけ、一例しかありません。

医学は興味深いもので、一例研究というものがあります。それと同じように、地球の生きものを一例と考え、宇宙の生きものを探した場合、現状では地球型を探す以外にないわけです。ですから、科学として、今私たちにできることは、地球型の生きものがある星がもう一つあるのだろうかという問いです。以前は、シリコンで形成された生きものが存在するかもしれない等々、様々な議論がありました。研究が進み、宇宙の物質の分布から考えると、炭素ではできているのではないかと考えられています。ただ、DNAについては、それを持っているかどうかは分からない。まず、葉緑体や水の存在の有無を手がかりに地球型生命の痕跡を探すところから始めていきます。

尾池 それに関しては、例えば、水や空気が存在するかどうかなど、生命が存在するために必要な条件がだいたい分かってきており、さ

らに言えば、星の大きさが一定の範囲内であることが条件です。地球は、星の大きさに関する条件では、小さいほうだと言われているですが、その範囲に収まる星というのは、今かなりたくさん見つかっています。調査が進むことで、より具体的な議論ができるようになると思います。ただ、宇宙物理学者の佐藤勝彦さんなどは、宇宙は他にもたくさんあるのではないかと考えています。

中村 はい。現在、複数の宇宙があると考えられています。

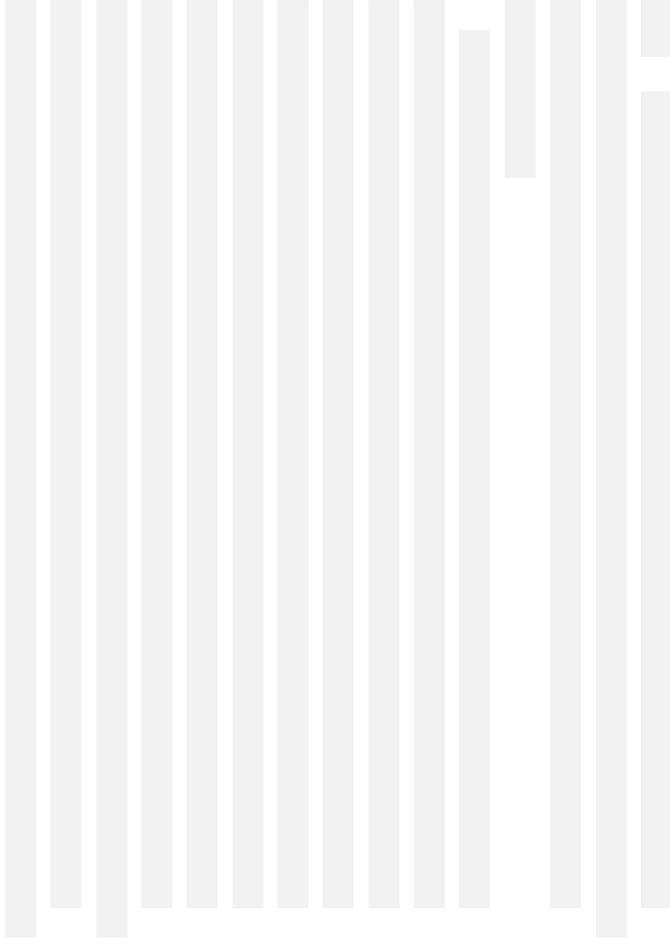
尾池 そうすると、宇宙の多様性という話も出てきますね。そういったものを踏まえた上で、今日のような議論をしていかねばならないと思います。

中村 今日の話は、地球の生きものについて分かっていることに基づいたものです。

井原 秋山先生、どうぞ。

中村

S T A P 問題などがまさにそれに該当するかと思いますが、

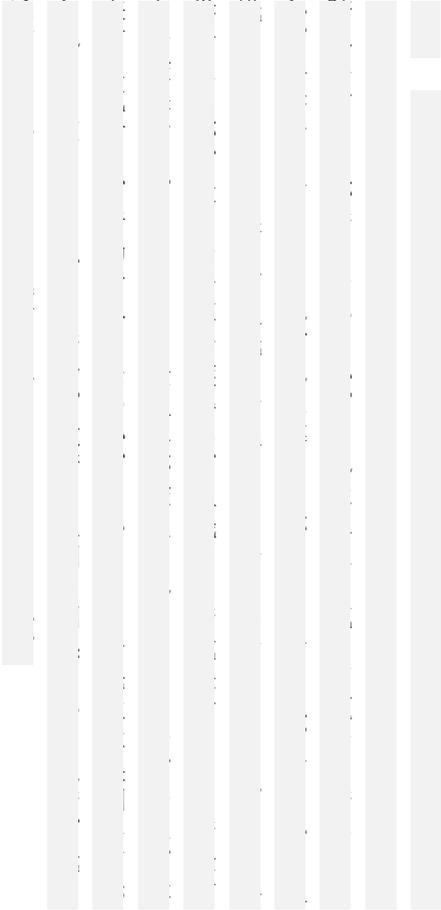


科学は経済と結託しているというよりも、一〇〇%政治に巻き込まれていると感じています。STAP問題について言えば、まず論文を読んで見事だと思えました。しかし、それは信用できないデータで書かれていたことが分かりショックでした。iPS細胞よりも素晴らしいというアピールで分かるように、明らかに政治的動きがあります。それを裏付けるように、文科省の下村大臣は予算獲得の指示を出し、安倍総理は総合科学技術会議に小保方さんを呼び、特別予算を組もうとしました。科学者の間での議論なしに記者会見と政治家の動きが出たのです。結果的には、捏造など様々な問題が指摘され、止まりましたが。しかし、私は、この問題の一番の問題点は政治が科学者の議論なしに勝手に動いたことにあると思っています。それが科学を歪めている。たまたまSTAP問題は表面化しましたが、毎日同じようなことが起きています。

私は科学者仲間にと時々、何十億円もの予算に対して、「使いきれませんから必要額にして下さい」と言えないのかと問うことがあります。しかし、そんなことは誰も言いません。人間は、一度五十億円もらえば、次は百億円が欲しくなるものなのです。自分の仕事をす

るために本当に必要な金額をもらいたいのではなく、たくさんのお金をもらいたくなる。このようなシステムを科学の中に持ち込んでしまったのは、政治であり、そこでは経済を意識しています。

中村 そうでしよう。私の考えで、社会を動かせるとは思っていません。ただ、生命誌の研究を二十年間続けて、周囲の人たちはそれを評価してくださるし、自分としては納得する形でここまで進んでき



たつもりです。私としては、今日お話した形で科学は動いていますし、社会も、生きものの視点、人間は自然の一部という認識の基に動いて欲しいと思っています。今すぐこのような発想で社会全体を動かせるかどうかと聞かれば、動かせるとは思っていません。みんながそう思って動いてほしいという願いはありますけれど。

中村 それはやはり、人間が生きものだということに気付き、それをベースにして、各々が自分の論理を組み立てていくことだと思えます。それしかないと思うのです。

井原 尾池先生、どうぞ。

尾池 今の議論に直接関係すると思うので、学問の歴史認識について付け加えさせてください。私は一九六〇年代に理学部の学生となつて以降、物理学の世界をずっと見てきました。学生時代、二十世紀全般はずっと物理学の世紀だったけれど、これからは生物学に物理の考えを取り入れるべきだという思いから、学生運動として生物物理学コースを京大の理学部に設立してほしいという運動をした世代です。その後、同コースは設立されたのですが、結局、生物物理学ではなく、生命科学という言葉が回ってしまつた。

その生命科学という分野が理学部の中から飛び出して、農学や工学、医学などと結び付き、とにかく人間が長生きするためはどうするかということを考え始め、製薬などの分野にかかわつた。理学の

世界で、生きものとは何かなどということを考えていた生物物理学の分野が片隅に追いやられ、生命科学一本槍になってしまった。その結果、現在ののように、経済と結び付く、お金と学者が結び付くということがどんどん進んだように見えるのですが、そのような歴史を分析しながら、今日のお話のような問題を考えていくということも大事なのではないかと思うのです。

中村先生がおっしゃるように、現代は、人間は生きもので、自然の一部であるという認識に基づいた生活を人間は営んでいない。人間は機械のようなもので、医療と薬で長生きをさせてもらっている人工生命体になってしまっているのではないかと感じています。本来ならば、四十から五十年の命であったはずの人間がどんどん長生きをするように仕組まれている。そのような世の中になっている時代に、人間は生きものであると訴えても、四十歳くらいの人ならまだしも、本来の寿命を過ぎた七十四歳の人々は、私も生きもので、自然の一部だともう言えないのではないかと思っています。自然の流れからすではみ出してしまっているのですから。

では、なぜこのような時代になってしまったのでしょうか。生命

科学が登場した背景、そもそもそれが目指していたものは何だったのか。どのような経緯でその分野に予算が集中するようになったのか。その部分を分析することで、さらに議論が深まると思うのですが。

中村 では、生命科学の歴史をお話しします。私の先生である生化学者の江上不二夫先生が、一九七〇年に日本で初めて、生命科学研究所を構想されました。江上先生は同年、東大を定年退職され、生命科学という新しい分野を創り出した。国の対応は遅いので民間でと考えられました。科学者が生命という言葉を用いること自体驚くような斬新なことでした。

生物学は、植物学、動物学、微生物学等の分野に分かれ、また遺伝学、発生学、生態学などという分かれ方もありました。しかし、微生物も動物もDNAを持った細胞でできている。すべての生命現象はDNAと関わることが分かった今、「生命とは何か？」という問いを立て、全てを一緒に研究する学問を始める時だというのが先生の提案でした。すると、生命あるものとしての人間も含まれます。研究対象に人間が入りません。逆に、生物学は、人間は扱いません。人

類学や医学、更には心理学など、別の学問です。生命科学では、細胞を基本に研究します。そこでは、人間は生きものであるという認識に基づいた研究や議論がなされます。

「生命とは何か？」と問い、そこから、人間とはなんだろうか？ ということを考えようとしたのです。

七〇年代は公害問題が話題になった時期でした。江上先生の発想の基本にその問題がありました。例えば水俣病は、企業が有機水銀を海に流したために起きたのですが、当時は、有機水銀を海に流したとしても、海は広いのだからそのうち薄まるので問題ないと考えたのです。つまり、物理学の発想では海は水です。実際には、海の中には生きものがいて、水銀は生物濃縮によって魚などの体内に蓄積されていった。そして最終的に、それを人間が食べたために起きたことです。海には生きものがいるという当たり前のことを考えずに、水で薄まるだろうとした科学は、本来の自然を見ていなかったわけです。技術にも生命や生きものの視点を組み込んで考えなければなりません。そこまで含んだ学問としての生命科学を考えられたのです。一九七〇年にこのような発想をされていたことは驚きです。私

は当時まだ三十代でしたから、生命科学と言われたときピンとこなかったのですが、今になって、先生のお考えがとてもよく分かります。現在、私は江上先生から教えられたことに基づいて生命誌を進めており、生命誌は、江上先生の生命科学の延長にあるものです。

ところで、同じ一九七〇年にアメリカでライフサイエンスという分野が起こります。アメリカではNSF（アメリカ国立科学財団）が科学に関する予算配分を担当していますが、それまでは生物学と医学では、別分野とされてきました。ところが、DNA研究が進み、人間も同じようにDNAを持っていることが分かった。そこで、病気の治療法などについても、DNA研究が重要になる。特に癌に与ってはDNA研究が大事と考え、医学と生物学を一緒にしてライフサイエンスと名付けました。具体的にはバイオメディシンです。ライフサイエンスは日本語にすると生命科学ですが、アメリカでは医学の科学技術化を指しています。

江上先生が提唱された生命科学が、本来の意味で私の求める生命科学だったのですが、日本の生命科学の主流は、アメリカ型の生命科学、つまり医学の科学技術化になっています。医学を技術化して

いくアメリカのやり方に日本も習っています。医療も、iPS細胞などについても、アメリカ型の考え方で進められているのが現状です。理化学研究所を筆頭に、日本国内の大学、研究所はこの考え方で貫かれています。

一九七〇年代にバイオエシックス（生命倫理）という分野がアメリカで生まれました。これは、医学が技術化されていくことに対してある抑制の役割を持って生まれた分野です。しかし、人間はどこから人間かなどという問いに答えはありません。実際には、研究が進むうちに、経済の問題になりました。例えば、限られた資源の中で、先端技術は富裕層に対してだけ使われることになるなどという問題です。倫理を議論しても正解などありませんから。そこから「生命とは何か？」という問い、生きものと技術の関係は考えず医療の先端技術を進めているのが現在です。

せっかく日本で七〇年代に素晴らしい発想が誕生したのに、なぜアメリカ型を採用するのかと疑問です。でも、グローバリゼーションとはそういうことです。アメリカ型ライフサイエンスの導入と同時に、科学に経済が介入し、経済的利益を優先することになってい

るのが日本の生命科学でもありません。

井原 生命誌を英語に翻訳すると何と言うのでしょうか。

中村 バイオヒストリーとなります。

生命誌は、江上先生のお考えを発展させたものです。江上先生の時代にはゲノムという発想はまだありませんでした。ゲノムという考えが出てきた時に歴史と関係という観点を加えて考えることが現実的になりました。そこで、バイオヒストリーとしたのです。ただ、人間は自然の一部で、生きものであるというコンセプトは七〇年か
らずと私の中で繋がっています。

レイチェル・カーソン
アメリカの海洋生物学者、作家。『沈黙の春』は、一九六二年六月に雑誌「ニュー Yorker」に抜粋が掲載され、九月に単行本が出版された。同書は、殺虫剤などの「合成化学物質」の無分別な大量散布（使用）は、生態系を乱し、生物環境の大規模な破壊につながることに警告し、人々の環境問題への関心を高める契機となった。その他の著書に『センス・オブ・ワンダー』、『潮風の下で』など。詳しくは、レイチェル・カーソン日本協会ホームページ等を参照。

中村 その通りです。今、秋山さんがおっしゃったことに付け足しますと、なぜアメリカで一九七〇年にライフサイエンス、バイオメデイシンという分野が登場したかという点、政治です。一九六〇年代はケネディ大統領のアポロ計画の時代でした。そこに人々の夢がありました。ところが、アポロは月へ到着し、ケネディ大統領は暗殺された。すると、月へ着いたこの技術は地球や我々の生活に何をしてくれたの？ という疑問が噴出してくる。結局、日常につながったのは、テフロンフライパンとゲイラカイト（ビニール製の洋風）などと言われました。しかし、あれだけ莫大な費用や人材を投入しながら、庶民の生活に持ち込めたものは少なかったわけです。

国連人間環境会議
一九七二年六月、スウェーデンの首都ストックホルムで開催され、地球規模の環境問題全般について議論した初めての会議。「かげがえのない地球 (Only One Earth)」をスローガンとした。同会議で、人間を取り巻く環境の健全な維持を求めた「人間環境宣言」や「行動計画」が採択された。詳しくは、環境省ホームページ等を参照。

から、転換が必要でした。

中村 ケネディの後に大統領となったニクソンは、大統領としてのレーゾンデートル (raison d'être、存在理由) を示すものとして、癌との闘い (War Against Cancer) を自身の政策の柱としました。アポロ計画は、月到着というとても難しいテーマでしたが、見事に完結しました。しかし、癌との闘いは、当初一〇年計画でスタートしたのですが、いまだに終わることができていません。生きものとの関わり合いには、終わりが無い、難しいものなのです。それを政治の世界で闘いを宣言し、勝利すると喧伝したことで、生命とは何かという基本を考えると、そこから遠くなってしまうました。しかし、このような流れが、バイオメディシンの中で新しい技術を生み科学を進歩させ、医学を進歩させたことは事実です。政治や経済の介入が本質を考える学問を歪めたマイナスも大きいのです。江上先生の提唱された生命科学の方向を進めたいというのが私の願いですが、現実

にはそうなっていないません。

井原 では、小松先生、いかがでしょうか。

小松 今日、私たち一人ひとりが他の生きものと同じく、三十八億年の歴史を共有しているのだというお話を聞いて、素直に驚きました。中学の教育の現場で、毎日毎日思い悩みながら生徒の前に立ってきましたが、いじめなどによって、いまだに十二万人ほどの子どもたちが学校に行けない、不登校を生み出している。また、自殺もあります。小中高を合わせると、一年間に五百名近くの子どもたちが自ら命を絶っています。さらに、所在不明の子どもたちについては、全国で約八百人に上る。そのような現実が教育界にはある中で、中村先生のお話を子どもたちにわかりやすい言葉で伝え、生命の尊さを考えたいと思いました。

また、今年の夏の夏のNHKのスペシャル番組で長崎に投下された原爆であるファットマンの衝撃波「マッハ・ステム（*）」についての特集がありました。アメリカは、長崎に原爆を投下するために、原

マッハ・ステム (Mach stem)
爆風の威力を増幅させる圧力波のこと。アメリカは一九四五年四月以降、原爆の投下によってマッハ・ステムを発生させるため、周回計算・検討を重ねた。原爆が長崎市に投下された際、爆発でマッハ・ステムが発生し、破壊力を増した爆風が壊滅的被害を与えた。詳しくは、NHKスペシャルホームページ等を参照。

爆と同程度の火薬を仕込んだ実験用の爆弾を作り、それを投下していたというのです。つまり、原爆を投下した際、最大の威力を発揮させるために、綿密な計算を行い、研究し尽くした結果が長崎の原爆投下だったということです。人間はなぜそういったことに技術や科学を役立たせてしまうのか、そういったことを考えながら、中村先生のお話をお聞きしていました。

中村 私も、他の生きものとの普遍性を考える中で、人間はいったい何なんだ？ なぜこのようなことを行えるのか？ と始終悩みます。今おっしゃった子どもたちに伝えるということについて申し上げます。小学校六年生の国語の教科書に「生き物はつながりの中に」という題の文章を載せていただいています。ここでは、今日お話ししたようなことをやさしく書いています。つながりの意味は、私たちは三十八億年の歴史の中でつながっているんだよということ、人間は生まれた時から死ぬまでかけがえのない存在としてずっとつながっているということ、また外界ともつながっている、この三つです。昨日のあなたも、今日のあなたも、明日のあなたも、ずっとつ

ながっている。そして、みんなともつながっている、人間だけがつながっているわけではなく、他の生きものともつながっている。私たちは、空気を吸っているから、この空気がどういふ空気かということもあなたに関係があるということを書いています。

すると、だいたい六百から七百通ほどの手紙が文章を読んだ小学生の子どもたちから届きます。必ず返事を書くことにしていますのでちよつと大変です。手紙の中に、毎年「僕はいじめられています」という内容のものがあります。

例えば、とてもサッカーが上手で、勉強もよくできる子がいて、先生もその子がいじめられているとは思っていなかった。しかし、実際には、サッカーのコーチにいじめられていたのです。その子が、手紙の中で、僕はサッカーのコーチにいじめられて、もう死のうと思っていましたけれど、つながりを知ったから、絶対死んではいけないと思いましたが書いてくれました。

つながりを感じてくれたというのでとてもうれしいのですが、残念ながら、いじめや死にたいという手紙が四、五通あるのは悲しいです。ただ、手紙のやり取りを通して、人間は自然の一部だというこ

とを子どもは分ってくれると感じます。大人は、子どもは何も分らないと思いがちなのですが、本質的なことは、子どものほうが分かってくれる。大人の方は、なんかそれ難しいですね、などとよくおっしゃる。科学の話となると、それだけで難しいですねとおっしゃる方がいるのですが、子どもは決してそんなこと言いません。

子どもの方が本質を分かってくれているという実感があり、子どもをバカにしてはいけけないと思っています。子どもの発想を大事にして、彼らと真剣に向き合うことで、私たちも彼らから学ぶことができると思っています。

小松 枝豆に「大きくなれよ」と話しかける、そういった感性は素晴らしいと思います。このような感性を持つ子どもたちは仲間を大事にしなが、一緒に成長しようという気持ちを持っていると思うのです。

中村 そうですね。農業は産業でもあるけれども、同時に教育の力を持っているのだということを実感しています。先ほどお話しした

福島の小学校だけではなく、農業高校の学生さんたちも素晴らしい。私は農業高校応援団を一人で結成して、もう二十年近く団長をやっているのですが、農業高校の活動について、少しお話しさせてください。

先日、農業女子フォーラムという企画を研究館でやらせてくださいというお願いがあり、開催しました。今、女性の中で農業に関心を持って新しい形で進めている人たちが多く、そういう人たちが集まって議論をしたいから場所を貸して欲しいということでした。もちろん私も参加して、そこに農業高校の女子生徒が来て、活発に話してくれました。酪農科を選んだ女の子がいて、学校は朝八時半に始まるのだけれど、牛がいるから毎日七時半には必ず学校に行くと言うのです。「大変でしょう？」と聞くと、「大変だけれども、行かないではいられない」と答えてくれました。

少し前になりますが、東京の農業高校の先生が、牛の世話のために、三百六十五日、毎日学校に来る生徒がいると言うのです。「お正月だけは先生が面倒を見るから休みなさい」と言っても来る。それだけ熱心なのです。

数学のために三百六十五日学校に来る生徒は恐らくいないですね。その酪農科の女子学生は、牛を見に行かないではいられない理由として、牛を飼うとはどのようなことなのかを教えてくださいました。かわいがるのかそういうことではないのです。牛は、商品だから病気にしちやいけない。絶対病気にしないということを思っただけは飼っているのですと言った。「じゃあ、いちばん大変なことは何？」と聞いたら、真夏に草を刈って、それをサイロに入れて発酵させる。その草刈りがいちばん大変だと言う。「酪農科に男の子は？」と聞いたら、女の子が十五人で、男の子が五人だと言っています。「あら、女の子のほうが多いの？」と私がつい言ったら、「男の子は根性がないですから」と返ってきました。何とも頼もしい答えでした。生きものとの向き合うということは、様々な体験を通して、日常と思想が成長していくことにつながる。農業は本当の意味で教育なのだと感じています。

井原　では、奥本先生、どうぞ。

奥本 さきほど秋山先生が言及されていた、どこから社会を変革で
きるのだろうかという問いについて考えていました。例えば、大学
という組織の中でも組織の暴力性のようなものをととも感じており、
そういった部分も変革が必要だと思っています。

そういった組織の暴力性をどのように克服するか、ということが、
私の日常の中のチャレンジです。それは経済や政治の暴力性などと
当然繋がってくるわけですが、対応策の一つとして、横に広がるネ
ットワークに一つの道筋が見いだせるのではないかと考え、実践し
ているところです。

私の勤めている大学がある大阪の玉造は、とてもディープな下町
です。小さな町工場や様々なお店、いわゆるマイノリティと言われ
る人たちの生活空間、そういったものが展開している、とても面白
い地域です。そこに長屋があり、その一角を開放して人々に提供し
ている女性たちのネットワークがあります。もちろん、この集まり
は男性を排除するものではないので、男性も参加しています。その
人たちから最近声を掛けていただいて、一緒に平和を考えましょ
うとか、とてもフランクな感じで語り合っています。

先ほど中村先生が、サイエンスとは元来、知と理解という意味で、表現と創造とは切り離すことのできない関係にあり、先生ご自身も表現活動をされているという趣旨のことをお話されました。そういういったことと合わせて考えれば、今お話しした人々の繋がりの中で、話し合われる事柄も一つの表現や創造であり、それがこのネットワークの原動力になっているのかもしれないと感じました。

彼女たちは、日常の中にも人間関係の中にも、すごく混沌とした矛盾を抱えていて、その矛盾とともに暮らしながら、もちろん衝突することもありますが、それを一つのエネルギーに昇華させながら生きているという感じがします。

もう一つは、今年、南京で平和の実践トレーニングというものを二週間実施しました。まだ、始まって四年目ですが、毎年、夏に二週間のトレーニングを提供しています。日本と朝鮮半島、中国本土、台湾、モンゴルなど、東北アジア地域からの参加者が集い、場所も同地域のどこかとしています。残念ながら、北朝鮮から直接にはまだ参加者を得られていない状況ですが、そういった地域の市民社会、NGOのネットワークの中で企画・運営を行っています。今回は

二十代から五十代の参加者五、六十人が集って合宿を行いました。ここでは、様々な対話と理解、創意工夫、表現活動などが実施されます。ここでも、やはり多くの対立や矛盾が同時進行で起きながらも、人々は喧々諤々やっています。

そういった、対話や表現、創造の中にある根源的なものの一つとして言えるのは、いのちに対する敬意や尊厳、また、自分の中にある暴力性に気付くことなのではないかと思うのですが、中村先生はどうお考えでしょうか。

中村 今、おっしゃった、矛盾を抱えながら、というところが大事なのです。私はさきほど、生きものは矛盾のかたまりで、もし矛盾を解決しようものなら、解決した時にはその生きものは死んでいると申しました。今の社会は矛盾を許さないシステムを必死につくり出そうとしています。それは、生きものにとっては受け入れにくいシステムです。先ほど、小松さんもおっしゃいましたが、なぜ私たちはこんなことをするのか？ と聞きたくなることばかりやっています。原爆のことも含めて、本当に分からないことばかりです。大石さんの

写真集を見ても、なぜ同じ人間が殺し合うのだろうか？　と思いません。ただ、それをここですぐ解決できるわけではなくて、矛盾を抱えているという認識を持ちながら、そこからこの世界のシステムを変化させていくダイナミックなものを生み出していくしかない。おそらく、生きるということ、機械ではなく生命で考えるとは、そういうことだと思ふのです。

私は今、忍耐ということがとても大事だと思っています。それはつまり寛容ということでもあります。忍耐とは、我慢することではなく、何か悪いことが起きた時、それを我慢して逃げるのではなく、そういう複雑なものから目をそむけずに考えながら、耐えに耐え、そこから新しいものを生み出していくという強さです。塩野七生さんも精神的に強い人間が必要なのだとおっしゃるけれど、耐えに耐えてそこから新しいものを生み出していくことが重要なのです。何かあれば、すぐに放り出したり、○か×かで割り切ったりと、そんなことでは生きていけるとは言えないし、生きることがどんな難しくなる一方です。今まさにおっしゃった、矛盾を抱えながら、ということが、彼らが生き生きとしている理由だと思えます。

学問が総合化していくには学問として繋がるのではなくて、人間で繋がっていないければならないと気付きました。私の場合は、小規模ながらも違う分野で同じ考え方をお持ちの方々へと繋がりながら、考えを共有しています。

昨日は、建築家の伊東豊雄さんとお話しをしました。伊東さんは、「3・11」後、東北地域に「みんなの家」をお作りになっていらっしやいます。「みんなの家」は、集会所のように、地域の人たちが集まる場です。ただ、それを専門家が建てて終わりでいうのではなく、その地域に住む人たちと長い時間、話し合い、今何が欲しいのかということを確認しながら、「みんなの家」を建てていく。これが本当に、被災地の人たちを元氣付けています。伊東さんは、「建築家は今、『人間は自然の一部』ということに基づいて建物を建てていない。それではダメなので、生命誌の『人間は自然の一部』ということを大事にしようと思う。『みんなの家』という発想もそこからのもの」とおっしゃってくださいます。

被災した場所にそのような提案をして活動している方がいる一方で、政府は津波を防ぐために巨大な防潮堤をつくると言っている。地域

の人も建築家も、やめて欲しいと言っているけれども止まらないのです。生命を基本に置く考え方で行動をしても、決してそれで他の人や物事の全てが動いてくれるわけではないし、悩みが消えるわけでもありません。しかし、やはり同じ考えや思いを持つ仲間たちと横の繋がりを持って、小さくてもやっつけていきたいと思うのです。

井原 フロアから、「もし平和観という考え方があるとするれば、機械論的平和観からの脱却という意味で、『生命誌的平和観』こそ今後は必要ではないか。さらに『観』とは何かと考えると、『W H A T』『H O W』から『W H E N』『W H E R E』までを『誌』とするならば、『W H Y』『W H O』までが『観』なのか。哲学、科学史、日常をすべて含めた『観』を学び取っていくことこそ、今後の人間の課題ではないか。学問もメディアも、そこを構造的に見ておくべきだということを教えていただいた。この『観』を表現し、創造する場を教育の中に用意したいと思った」というご感想が届いています。

また、「平和と幸せを願いながら生きること、この生きものとして当たり前のことを学問からも後押しし、世界の大きな流れにするた

めに何が必要でしょうか」という質問があります。

中村 世界観ということで話をいたしました。それは平和という課題も含んでいることはもちろんですので、おっしゃって下さったことは是非進めていただきたいと思えます。私は、大きなことをやることも思っています。自分が大切と思うことを地道に続けていくことが好きなので、世界の大きな流れと言われると困るのですが。先ほどお話ししたように、同じ考え方をする方たちがいろいろな分野にいて下さるので、そのようにして広がっていくことを願っています。

井原 「生命誌の観点から核エネルギーと人類、生きものは共存できるのか？」という質問もきています。

中村 核エネルギーと人類、生きものは共存できるのかという問いは、大変難しいものです。自然界にもいわゆる放射能というものはあるわけですが、閉じた中からそれを引き出すという形にしたのが

科学技術です。特に「3・11」以降、正直に申し上げると、すぐにイエス、ノーとは言えない、悩んでいるテーマです。

尾池先生が先ほど科学や技術も歴史で見ないといけなとおっしゃいましたが、その歴史は私が学生の頃に始まっているわけです。私は大学で理科一類に所属していましたが、同級生はほとんど工学部で、かなりの人数が原子力に関わっていました。その時もつとも若者を惹き付ける夢の技術だったからです。仲間内で集まる時、原子力について聞いていました。そういう個人的な歴史が私の中にはあります。今、クラス会をやると、自分たちは一体何をやってきたのだろうと言って、その仲間たちが非常に悩んでいるのです。それで、核エネルギーについての議論をするのですが、そうかといって彼らを全面否定することはできない気持ちがあるのです。そのような個人的な歴史もあり、正直に言うとは、これに関してはイエス、ノーのお答えがすぐに出せません。

井原 豊崎先生、どうぞ。

豊崎 この「生命誌絵巻」は、地球上に生命体が誕生したとされる三十八億年前からの歴史が記されていますね。ウラン鉱石ができた時間も同じです。そして、ウラン238の半減期は四十四億六千八百万年です。

科学と技術が結託して、核兵器や原子力を開発してきましたが、人間がつくり出した人工放射能が、生命誌絵巻にある生きもののほとんど全てを破壊しているのが現在の状況ではないかと考えています。アメリカの生物学者が、チェルノブイリ原発事故の放射能汚染による危険区域である原発から三十キロ圏内にバクテリアや菌がいなくなっているというレポートを出しました。本来、落ち葉などはバクテリアなどが分解して土に戻すのですが、彼らがいなかったために、落ち葉や樹木がそのままの状態に残っており、そこに放射能がどんどん入り込んでいく状況です。そこでもし、火事が起きれば、放射能が煙と共に飛散するという危険性が今迫っています。しかし、ほとんど誰もそれに注目しようとしなないということが書かれています。放射能汚染は人間が住めなくなったり、様々なことを引き起こします。しかし、生命体の基本であるバクテリアや菌糸類まで死滅

させてしまった地域を生み出したという事に強い衝撃を受けました。おそらく福島の周辺にもそれが起きているのではないかということも書かれています。そういう現実の中に今、私たちはいます。さきほど、水俣病をきっかけにして生命科学ができたとおっしゃっていましたが、そこには、海は生命体だという認識があったということですが、その海に私たちはたくさんさんの放射性物質を捨てているわけです。

こういった状況を、生命科学、あるいは生命誌研究の根本である、生きものとのつながり、共生などの観点から、どのようにお考えでしょうか。つまり、我々は全ての生命の根源的なものさえも壊しているということを考えた時に、生命誌ではどのように捉えているのかということをお聞きしたいのです。

中村 それは、本当に私の大きな悩みの一つです。私はこのように考えています、とお答えをすることが難しいというのが現状です。

いろいろな自然災害が起きます。私たちが原因となって自然を破壊していることもあるし、自然が私たちを壊すこともあるとお話し

しました。また、地震や津波などの自然による破壊の際に、こちらに科学技術があったために、破壊は増幅されていくということもお話しました。まさにそれが今起きているわけです。

もちろん地震や津波は恐ろしいのですが、もし、あのとき原子力発電所の事故が起こらなければ、被災地を回復する方法は、おそらく私たちにも分かっていた。しかし、現実には原発事故は起こった。汚染水を凍土式遮水壁でくい止めるなどと言われても、私にもうまくいくのかどうか分からないし、様々な情報を全体の中でどう位置付けていいのかということが分からないのです。今、おっしゃった問いは共有していますし、考え続けてはいるのですが、現在の状況の打開策としてこのようにすればよいのではないか、こう考えなければいけないのではないかと、実を言うと申し上げられない。

日本は「科学技術立国」を謳っています。ですが、福島第一原発事故が起きた後、現場を処理するためにロボットが活躍できたか、放射能を処理する技術がそこで使われたかと言ったら、何もないわけです。結局、人間が中に入って片付けている。日本は「科学技術」が何もない国なのか？ とあの時思ってしまった。一番必要な

ときに、使えるものが何もない。これで「科学技術立国」なのかとロボットの研究者が、ガタガタしている地形のところではロボットはなかなか動かないと言われていましたが、最初にお話ししたような「ここは摩擦のないところとする」という発想でできあがった技術でしかないと思えてしまいます。今の状況は、本当に自然を見ずに技術システムをつくってきってしまった結果だということをつくづく思うのです。だからといって、私が新しい技術を開発できるわけでもないし、私に何ができるのか、本当にそこは悩みどころです。こうしたらよいのではありませんか？ という答えは今、私の中にはどうしてありません。

豊崎 要するに、人間に限らず、生命の起源でもあるバクテリアなど全ての生きものを核というものは破壊しているというご認識はお持ちであるということですね。

中村 そうです。ですから、生きものという視点から考えれば、それは非常に大きな問題なのです。では、このような状況がなぜ起き

たのかと言えば、原子力発電所があったためですから、これはない
ほうがよいと、私もそう思います。ただ、さっき申し上げたように、
歴史をずっと考えてみると、今、私がここでただ「なかったら良か
ったのに」と言うだけで終わるのかという問いが自分の中にあって
悩んでいるのです。原発事故は、生きものにとってどうしようもな
い状況をつくり出し、それが続いている。これに対して私はどんな
アプローチができるのかということを今悩んでいます。

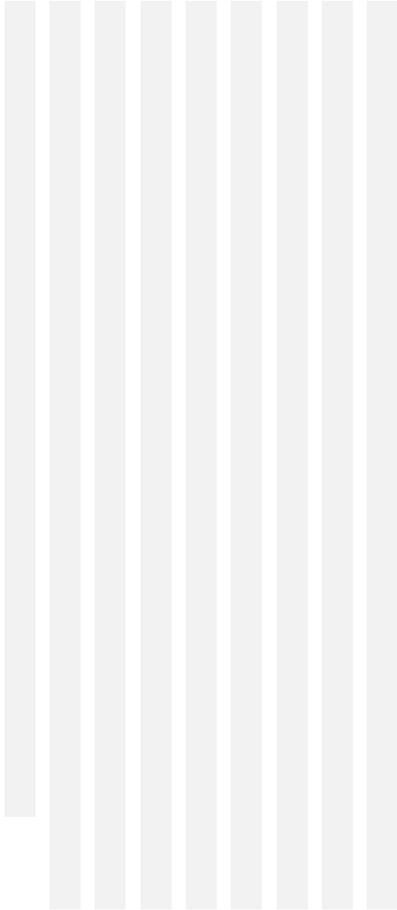
中村 ですから、生命誌の論理で考えれば、核エネルギーについて

は、”ない“ということを求めています。しかし、現実にはあり続けてしまい、そこに私の友人が関わっている。

私は、原子力発電所はないほうがいいと思っています。しかし、そのために、石油をどんだん燃やせばいいとか、そういうことではないと思うのです。そうだとすると、自然エネルギーを使ったり、さまざまな形で新しいエネルギーを考えていかなければならない。そうすると、東京などの大都市にビルをたくさん建てて、人々が一極集中するという生き方は必然的にできないと思うのです。北海道から沖縄までそれぞれの場所を活かしながら、人々が生きるというスタイルを取らない限り、自然エネルギーは活かせません。メガソーラーを使って東京に電気を送るなどという発想は私にはできません。ソーラーはそれぞれの場所で活かせないといけない。一時期バイオマスやブラジルから運んでくるというような話があったのですが、バイオマスなども同じで、地域ごとに活用していく生活を考えなければならぬ。

つまり、私たちは暮らし方自体を変えていかなければならない時期にあるわけです。ですから、都市に一極集中で高層ビルを建てな

がら、一方で原子力反対と言うのは、私の中では矛盾を感じるわけ
です。一極集中ではなく、みんなが北海道から沖縄まで散らばると、
単純計算すればおよそ一つの県に二百五十万人ぐらいの人口にな
ります。そのぐらいの密度で人が散らばって、それぞれの場所でエ
ネルギーを上手に使って生きていく。そのような構想を立てなけれ
ば、「原子力発電 ノー」とは言えないだろうと感じています。大都
市を維持したまま、自然エネルギーのみで電力をまかなうことは不
可能だと思うのです。まずは一極集中ではない社会システムをつく
るということが先で、そうして自然エネルギーを上手に使って、同
時に人々が今のようにエネルギーを際限なく使うという生活ではな
い選択をして暮らしていくことをセットでやっていかなくては
ならない。そのうえで、原子力はいらない、という選択をしたい
と思います。

A series of ten vertical bars of varying heights and shades of gray, arranged in a row on the right side of the page.

中村 おっしゃることはよく分かります。ただ、私の論を立てていくと、それをやらないで社会に変革を起こすことは難しいと思います。もちろん前提には、人間は生きもので、人間は自然の一部だという認識が共有されていてほしい。自分のことを言っても仕方がないので、例えば私は夏はクーラーを使っています。うちは天窓を開けておくと風通しがいいので、私は本を持って風の通り道へ座ってそこで仕事をする。冬には、日の当たるところに行って仕事

をする。それは何かを考えてのことではなく、それが好きだからやっているだけなのです。そのような感覚は、おそらく私がこの仕事をしているから持っているのだと思っけていますし、そういつた暮らしをみんなで一緒にやりたいという願望はあります。そんなことを言っていたら為政者と同じだという批判はもうその通りだと思つながら工夫して、自然の一部として生きるか、そういつたことが念頭に置かれるようになれば、私たちの暮らし方も変わつていくし、社会も変わつていくのではないかと思つたのです。

井原 では、ヤノベ先生どうぞ。

ヤノベ 中村先生が人形劇や生命誌絵巻でご自身の考えや伝えたいことを表現として展開されているということはとても素晴らしいことだと感じています。

今目の前で起きていることについて、考えなければならぬということとは分かります。ただ、僕の希望としては、中村先生には、現在

起こっているようなことは今までも起こってきたと言っていたきたい。地殻変動や火山の噴火、氷河期もあった、それでも生命はしぶとく生きてきたのだから、こんなことぐらいで生命が滅亡することはない。もっとポジティブな発想で、ダイナミズムを持って時代を見ていくことで、より良い世界が開けていくのではないかと、どっしり構えて言っていたのだと思います。

もちろん生命誌研究館のほうでは、そういった形で伝えていらっしやると思いますが、そう言っていただけで、僕らは生きるエネルギーを見出し、次の生命に繋がるような活動ができるのではないかと思っています。

中村 そうですね。日常的にはおっしゃっていたようなことで考えていて、仲間にも九〇%駄目なことがあっても、一〇%でも何かいいことがあれば、その一〇%のほうを見てやっつていこうと言っています。ただ、それは社会全体から見た時に、許されるのか、という問題はあるでしょうから、一方では、自分の中の悩みにもなります。しかし、仲間と具体的に何かやる時には、いいところを見て、

そこを伸ばすという方向でやっついていこうとはしています。

井原 フロアから中村先生に「生命誌という考え方に先生の生命誌研究館以外で触れられる場所がありますか？」という質問が来ている。

中村 残念ながら、世界中で生命誌研究館だけが唯一の場所です。

井原 ありがとうございます。

それでは、最後に尾池先生お願いします。

尾池 今日課題がたくさん出て来ました。

生きていくということはどういうことなのか？ ということを人間は考えますね。ですが、同じDNAを持ち、三十八億年の歴史を共有するたくさんの生きものが存在し、私たちもその中の一つであるから、わざわざそんなことを考えなくてもいいかもしれない。他の生きものと同様、我々もここに存在し、生きているわけですから。た

だ、そういった感覚は大切なものかもしれませんが。中村先生のおっしゃるように、自然の一部なのだという感覚です。

大量絶滅に至るまでには、まだ少し時間がありそうなので、どうすれば人間も他の生きものと一緒に地球社会の中で共存しながら生きていけるのかということ、やはり悩んでいくしかないと思います。そのような課題を今後、この会議で深く議論をしていくことになるだろうと思います。

ただ、他の生きものと共に地球社会の中で生きていくということ、考えたとき、やはり核燃料物質というのは良くないと思うのです。他にも人間は、技術の世界でモノを作ったり壊したりと、いろいろな不自然なことをやってきた。その多くが、生きものには良くない面を持っていて、このほうが多いようには見えます。とりわけ、核燃料物質に関しては生命に対しては、悪い影響を与えている。我々人類に与えられている課題は、地球社会での共存のために、核燃料物質を何とかして無毒にして、次の時代の生きものたちに大切な地球環境を残していこうということしかないだろうと思います。

ですから、文明哲学研究所でも、小出裕章さんなどの専門家の方々

にも我々の活動に参加いただき、核燃料物質をどのようにして無毒化するかということの研究テーマにすることが必要です。改めてそういう思いがしました。

そういうことを考える背景には、今日の中村先生のお話があります。とにかく三十八億年共通のDNAを持った生きものが仲良く一緒に地球で共存していくのだ、ということ。生きものだけではなくて、地球のあらゆるものと共存していくのだということを一つの目標にしながら、議論を続けていくしかなさそうです。

井原 ありがとうございます。本日の中村先生の講演を通して、今、尾池先生がおっしゃったようなことを考えていくことができると思います。私も文明哲学研究所もそういう方向を持ちながらやっていく。生きものという視点から、核廃絶、世界平和を考えていかなければならないということを実感いたしました。

本日は、ありがとうございます。

* 予定をされていた基調講演内容を要約して掲載します。

『いま何を観るべきなのか』

大石芳野（おおいし・よしの）

（ドキュメンタリー写真家、文明哲学研究所客員教授）

❖ 「見えないものを観る」

「いま何を観るべきなのか」というタイトルを文明哲学研究所から頂いた時、すぐに頭に浮かんだのは「カンボジア」と「アウシュヴィッツ」だった。どちらも「年数が経ちすぎている」と思われるかもしれないが、私がおこから得たことは今の時代に照らし合わせても、歴史のページに留めておくだけでよいことではないと思っている。混沌としたこの今だからこそ、考えてみたいと思っている。何よりも、当事者にとっては決して「過去のこと」にはなっていない。

「いま何を観るべきか」とは、哲学的にも言及できる深く難しいテーマだ。ややもすれば写真から離れてしまいたいことになる。私がなぜ、カンボジアが先ず浮かんだかというと、カンボジアのポル・ポト政権の自国民に対する大量虐殺ほど、未だに謎に満ちたものはないと思うからである。私たちは今、アジアの小国で三十五年前に終わった恐怖政治として思考から取り除いていいのだろうかと感じている。つい最近も、国際裁判が開かれポル・ポト政権首脳部の人たちへ

の判決も出たが、上告され裁判は今後も続くだろう。

私にとってカンボジア大虐殺は今でも釈然としない謎だらけのものだ。

① まず、全土で累々たる遺骨をこの目で見てしまった。

② 人びとは「今しがた地獄から逃れてきた」という表情だった。笑っても微笑んでも眼は闇の世界を見せていた。

③ 殺されると知っていても、なぜ皆ポル・ポトのリーダーに従って行ったのか。

④ なぜ多くが言うなりになり、暴動も起こさなかったのか（一部チャム人が起こしたが、それ故にチャム人への厳しさは増して三割ほどしか生き残らなかったと言われている）。

⑤ ポル・ポト時代に起こった事態は政治的な意味ばかりでなく、人間の問題としても深いものを秘めている。今の日本、日本人にも通じるものを考えさせられる。

⑥ 一九七九年一月にポル・ポト政権が崩壊した後も日本では「大虐殺はなかった。あれは捏造だ」という主張が十年間近くもまかり

通っていた。

現在の日本で見えていることの奥にあるものを探るなかで、夫々に見えているものをさらに深めるためにも、改めてカンボジアを一緒に考えたいと思う。



カンボジア。虐殺は本当だったのかを確かめたくて村人に頼んだ。掘り起こしていない地中から白骨化した遺体が現れた。

◆ 「カンボジア」

混沌とした今の時代、情報が溢れている時代に、私たちは真実、もしくはそれに近づけてものを考え、見ることができるのか？

得てして表面に現れた数字、形、色などに振り回されていると、目に見えないものの奥に潜む本質を見失い分らなくなることもある。しかも、政治、社会、思想などに対しての考え方が取りざたされる状態などに対しては、真実はあるようでない、ないようであるといった状況に取り囲まれてしまう。そうなると思えるものも見えなくなり、分るものも分らなくなって、多くの人たちは無気力に陥る。正にいまはそうした状態にあるだろうと思う（少なくとも、私はそうである）。

カンボジア。誰もが地獄から戻ってきたばかりだという眼をしていた。孤児が溢れた。



そこで考えるのがカンボジアのポル・ポト政権による自国民に対するジェノサイド政策だ。

一九七五年四月から一九七九年一月、この間に百七十万人とも、二百万人とも、それ以上とも言われる人たちが殺害、餓死、病死などで命を奪われた。数字はどこまで事実を積み重ねているのか？ 数字は政治に操られる傾向が少くない。

近年はカンボジア特別法廷が開廷され、この八月、ポル・ポト政権の首脳陣に無期懲役や数十年の量刑が、確定はしていないが言い渡された。彼らの中には老いによる病死や認知症などで刑を免れたケースもある。

翻ってみると、当時、日本国内ではカンボジアのジェノサイドに対してほど、奇怪で奇妙な伝わり方はなかった。まず、主なる報道

や情報が、「虐殺はなかった」と「白を黒、黒を白」と伝えた。あるいは「誰か」という主語ナシが当然のように蔓延した。もし、「ポル・ポト政権が」と言おうものなら「政治的だ」と批判され、まるで戦時中のように「アカだ」「ソ連派だ」「反米だ」などと決めつけられた。そうした嵐の中ではあったけれど、私もカンボジアに向かった。

一九八〇年一月からタイ・カンボジア国境に通い、同年七月にカンボジア国内へのビザがようやく取れてプノンペンから全土を回った。そこで私が見たものや聞いた言葉などは、どれも本当かと目を疑い耳を疑うようなものばかりだった。何よりも、人びとは「たった今、地獄から戻ってきた」といったような深い闇を湛えた眼をしていた。そして、最も辛かったことは何かを尋ねると「人間の尊厳を蔑（ないがしろ）にされて、家畜以下の扱いしか受けなかった」とだと口々に言った。

私の目の前にある累々たる遺骨。正にキリング・フィールドだ。けれどそれは本当に殺されて穴に埋められ掘り起こされたものなのか。あるいは日本の大勢が主張したように余所から運んできて穴の周り

に置いたものなのか。遺骨は私の目の前にある。しかし眞実はどうなのか。科学者ならば土壌や骨などを調べることもできるだろうが。そこで、村々を回りながら私が見つけた虐殺現場だった場所を掘ってもらったり、掘りかけていた場所をさらに深く掘ってもらったりして、事実の積み重ねを繰り返した。

いくらこうした事実を積み重ねても、眞実はなかなか見えてこない。いったい、なぜこれほどの人たちが殺されなければならなかったのか。この一人ひとりにはいのちがあり人生があり、尊厳もあった。家族もいたろう。どういう時代であれ将来への希望を抱いてもいたろう。

けれど、嘆かわしいことに、日本の主なる意見はその後も長らく、「カンボジアに大虐殺はなかった」だった。

アメリカとソ連、ソ連と中国が対立していた。「敵の敵は味方」の代理戦争をベトナムが背負い、さらにカンボジアが担わされた。日本では八〇年代末辺りになって、ようやくポル・ポト政権の大虐殺は周知の事実となっていた。自衛隊がPKOとしてカンボジアに派遣されたことも大きな要因だろう。カンボジア人にしてみれば長

い道のりだったとも言える。

けれど、未だに疑問の解決はない。

「いったい、あの大唐殺は何だったのか。理由はあれこれあるけれど、それでも、なぜ？……といった思いは拭いきれない。」

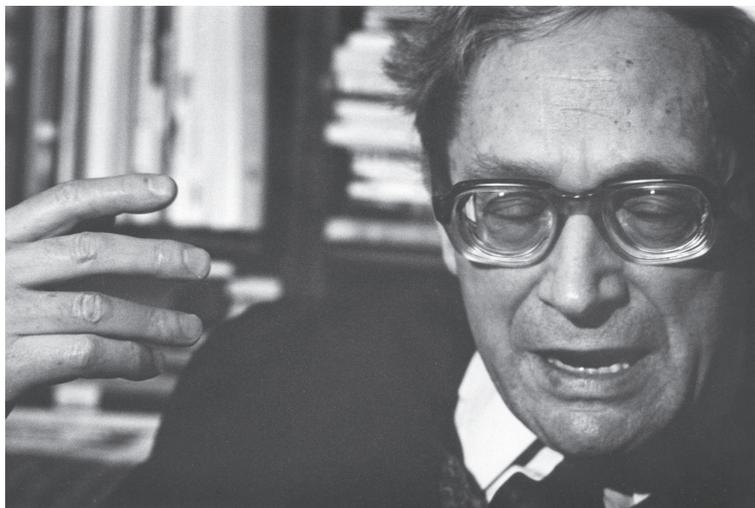
なぜこれほど大勢が死に向かったのか。権力やそれに準ずる大きな力から逃れられなかったのかもしれない。多くの人たちと話をして痛感したことは、「みんなが従っているから」「みんな我慢しているから」といったある種の思考停止状態に置かれていたような言葉だった。

もちろん単純に比較はできないが、いま、この日本の政治状況にもどこか似たようなことを感じている。一様ではないが、メディアをはじめ、多くが思考停止状態に陥ったかのようなからだ。少しずつ多方面からの声は聞こえ出したけれど、私自身はまだ鬱状態というか、無気力状態が続いていると感じる。日本の「おとなしい現象」「曖昧な物言い」などのなかで、ポル・ポト時代のような恐怖はむろんないものの、ふと、日本の私たちは、将来の子どもたちの安寧の時代も含めて大丈夫かと考えてしまう。

❖ 「アウシュヴィッツ」

カンボジアを取材しながら、まるでアウシュヴィッツのようだ……
と想っていた。第二次世界大戦から三十年が過ぎた時にアジアの小
国カンボジアでホロコーストが繰り返された。私たち現代人はあの惨
劇から何も学ばなかったのか。そう思った思いが募り、一九八六年に
ポーランドへと飛んだ。ポーランドにはナチスが造った絶滅強制収
容所、労働収容所、銃殺所などがヨーロッパで最多だ。そして、ヨ
ーロッパ中からポーランドに連行された人たちのなかで、千二百万
人もがいのちを落とすと言われている。カンボジアとは比較にな
らない数字が、歴史の中に刻まれた負の遺産だ。

強制収容所を生きのびた人たちに会い、話を聴いて回った。目の
前のその人は、どの人も他の人たちとほとんど変わらない。過酷な
人生を送った人だとは全く気付かない。雑談をしても何ら変わ
りはないのだけれど、ひとたび当時の話になると見る見る表情が陰
しくなって、深く闇のような記憶の沼に沈んでいくようになる。何



アウシュヴィッツでの体験を話し始めたユダヤ人のレオンさんは見る間に闇に引き摺り込まれた表情に変わった。

十年が経とうとも、心の奥から記憶が抜け出していくことはありえないと言わんばかりだ。最も辛かったことは何かと尋ねると、誰もが「人間の尊厳は奪われ、ぼろ雑巾のように捨てられたこと」だと言った。ボル・ポト時代のカンボジア人と同じだった。

あれから七十年が経とうとしている。彼らもまた寿命を迎え、私が会った多くの人たちが亡くなった。やがてゼロになろう。けれどナチスを抱えたドイツは「やれやれ、終わつた」とはならないだけの政治的な償いと関係改善の努力をし続けている。実際、ドイツ人の若者が収容所跡で自主的に働く姿を何度も目にした。その一方で、ネオ・ナチズムの人たちは虎視眈々と自分たちの勢力が息を吹き返す日を狙う。日本では「ヘイト・スピーチ」



アウシュヴィッツに捕えられた人たちの髪の毛。その髪の毛で織った毛布。

に代表される言動が広がっている。広島では、八月六日に合わせて、平和記念公園周辺を大勢の人たちが警察官に護られながら大音響で行動していた。

見えるもの、数字や形に目先を奪われていると、とんでもない畏に罹ってしまう。いまの日本の政治状況もしっかりではないか。



福島。八枝子さんは浪江町の実家で「放射線量が高く戻れない」と涙に咽（むせ）た。

❖ 「福島 土と生きる」

放射能こそ見えない。見えないからこそ怖い
が、半面、見えないからこそ安心感もある。
背と腹だ。悪臭が漂っていたり、色がついて
いたら違った反応になる。

もし政府が、フクシマはなかったことにした
いと思ったら、放射性物質の被害は容易く誤
魔化せそうだ。現実には、そうさせない意識
が広がっているけれど、見えないだけに危う
い。すでに帰村や個人の線量計の着脱、さら
には汚染水、汚染土など、大なり小なり、信
頼しにくい数値が横行していないかと疑念を
抱く事態が続いている。

なぜか。それは、一時の水俣水銀事件のよ
うに、なかったことにしたいのではないかとさ
え疑いたくなる。しかし現実には水俣がそう



福島。川俣町山木屋は第一原発から40キロだが高い放射性物質の汚染により全員が避難した。除染袋の山を背に大輔さんの怒りは大きい。

だったように、隠しきれるものではない。「微量の被害に留めよう。なぜなら、日本の近代化と発展に欠かせない基幹産業だからだ」といった体制の思惑が透けて見える。

政府や行政などの体制がまさか国民を見捨てることはないだろうというのは錯覚だ。諸外国との経済的競争や近代的発展に不都合となったら、切り捨てるのではないか。やり方は違っても、こうした思考の構造は、何もユダヤ人というだけで死に追いやったナチスばかりではないだろう。

ふるさとへ帰りたいという人びとの切なる願いを逆手にとって、三年が過ぎた福島で、「放射能汚染は下がった」と帰還を進める。「帰りたい」人たちの願いと体制側の「返したい」思惑とが重なった。本当はどうなのか。子どもも赤ちゃんも住める状態に回復したの

だろうか。科学者でさえ見方が分かれているなかで、私たちがそこにどうやって与することができるのだろうか。

カンボジア、アウシュヴィッツ、福島も見えないものを観る考え方や姿勢が欠かせないのではないか。幾つもの事実を積み上げ、今に重ねながら観続けていかなければならないのではないかと思う。

平和文明会議メンバー（敬称略・順不同）

松本健一

作家、評論家。麗澤大学教授。文明哲学研究所客員教授。評論、評伝、小説など多方面で執筆する。『近代アジア精神史の試み』でアジア・太平洋賞、『日本の近代——開国・維新』で吉田茂賞、『評伝 北一輝』（全五巻）で司馬遼太郎賞と毎日出版文化賞を受賞。他に『白旗伝説』、『北一輝論』、『評伝 佐久間象山』、『司馬遼太郎が発見した日本——「街道をゆく」を読み解く—』、『三島由紀夫と司馬遼太郎』、『海岸線の歴史』、『泥の文明』など。

中村桂子

理学博士。J-T生命誌研究館館長。文明哲学研究所客員教授。国立予防衛生研究所研究員、三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、早稲田大学人間科学部教授を経て、九三年、自らの発想で創設した生命誌研究館副館長に就任。二〇〇二年より現職。著書に『「生きている」を考える』、『「子ども力」を信じて、伸ばす』、『自己創

出する生命』など。

大石芳野

ドキュメンタリー写真家。世界平和アピール七人委員会委員。文明哲学研究所客員教授。戦争や内乱、急速な社会の変容によって傷つけられ苦悩しながらも逞しく生きる人びとの姿をカメラとペンで追う。著書に『ベトナム 凜と』（土門拳賞受賞）、『無告の民 カンボジアの証言』（日本写真協会年度賞受賞）、『カンボジア苦界転生』（芸術選奨文部大臣新人賞）、『福島 FUKUSHIMA 土と生きる』など。

ステイブン・リーパー

アメリカ、イリノイ州生まれ。ヒロシマ・ピース・プラットフォーム代表。広島女学院大学学長特命客員教授。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECN A）客員教授。近江兄弟社学園 International Communication Class 科長。文明哲学研究所客員教授。二〇〇七年米国人として初めて広島平和文化センター理事長に就任。全米における

原爆展の開催や核兵器廃絶をめざす二〇二〇ビジョン・キャンペーンなど広島から世界に向けて核兵器廃絶を訴えてきた。二〇一三年同職を辞任。今後は日米を結んで平和文化の浸透に努める。翻訳家。著書は『平和文化入門編』Peace Culture 101。

豊崎博光

フォトジャーナリスト。文明哲学研究所客員教授。一九七八年にアメリカが核実験を行った太平洋中西部、マーシャル諸島のビキニ島住民や水爆実験の死の灰をあげせられたロンゲラップ島住民などの取材を始めたことをきっかけに、以降、世界の核実験場などの施設と放射能に汚染された風下地域に住む被曝者、環境と地域社会への影響などを取材。著作『アトミック・エイジ―地球被曝 はじまりの半世紀』（第一回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）など。

小松正明

原水爆禁止大阪府協議会事務局長。文明哲学研究所客員

教授。日本平和学会、日本生活教育連盟所属。核兵器廃絶、原発ゼロに向けた取り組みに精力的に従事。「一人ひとりを真に大切にする学年集団づくり」、「広島・長崎・沖縄―君の人生に生きている」など全国教育研究会にて発表。

鎌仲ひとみ

映画監督。文明哲学研究所客員教授。フリーの映像作家として、テレビ番組、映画を監督。二〇〇三年ドキュメンタリー映画『ヒバクシャ―世界の終わりに』以降、二〇〇六年『六ヶ所村ラプソディー』、二〇一〇年『ミツバチの羽音と地球の回転』三部作で放射能汚染、被ばく、原発やエネルギーの問題を追う。ほかに、二〇一二年『内部被ばくを生き抜く』などのドキュメンタリー作品がある。著書に『原発の、その先へ ミツバチ革命が始まる』など。

奥本京子

専門は、平和学、平和ワークにおける芸術アプローチ、

紛争転換・非暴力介入論、ファシリテーション研究、NGO活動研究。大阪女学院大学教授。文明哲学研究所客員教授。日本平和学会（理事、平和と芸術分科会副責任者）、日本英文学会、日本シェイクスピア協会、国際トラセンンド（認証トレーナー）、東北アジア地域平和構築イニシアチブ（運営委員会委員長）など多数の活動に精力的に参加。著作に『平和ワークにおける芸術アプローチの可能性』など。

大澤真幸

社会学者。文明哲学研究所客員教授。社会学博士。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学。千葉大学文学部助教授、京都大学大学院人間・環境学研究科教授を歴任。著書『ナショナルリズムの由来』、『不可能性の時代』、『「正義」を考える』、『「世界史」の哲学 東洋篇』、『夢よりも深い覚醒へ―3・11後の哲学』など。

尾池和夫

京都大学理学博士。京都造形芸術大学学長。京都大学理

学研究科長、副学長を歴任、その後第二十四代京都大学総長、国際高等研究所所長を務める。二〇〇八年から日本ジオパーク委員会委員長。著書『俳景（四）―洛中洛外・地球科学と俳句の風景』、『四季の地球科学 日本列島の時空を歩く』、『日本のジオパーク』、『変動帯の文化』、『日本列島の巨大地震』など。

宮島達男

現代美術家。京都造形芸術大学・東北芸術工科大学副学長。国内外の主要美術館での展覧会多数。世界の美術館に作品が収蔵されているほか、パブリックアート作品も多い。世界アーティストサミットを開催。一九九六年から、長崎で被爆した柿の木二世の苗木を世界の子どもたちに育ててもらおうアート・プログラム「時の蘇生・柿の木プロジェクト」を推進。

秋山豊寛

ジャーナリスト、京都造形芸術大学芸術学部教授、農民、宇宙飛行士。テレビ局の記者だった一九九〇年十二月二

日、日本人初の宇宙飛行士としてソユーズ宇宙船に乗船し、九日間宇宙飛行。その後、福島県で農業を営み、無農薬栽培やしいたげ栽培を実践するが、「3・11」東日本大震災と原発崩壊のため「難民」に。著書に『原発難民日記』、『農人日記』、『宇宙と大地』など。

田口洋美

環境学、民俗学、文化人類学専門。東北芸術工科大学東北文化研究センター所長、同芸術学部教授。一九九六年に狩猟文化研究所を設立、同代表。一九九〇年マガギサミットを発起、主宰幹事を務める。山と人と動物を知る異色のフィールドワーカー。近年はロシア極東、シベリア地域の先住民族研究や野生動物の保護管理問題などに着手。

ヤノベケンジ

現代美術作家。京都造形芸術大学美術工芸学科教授。ウルトラファクトリー・ディレクター。ユーモラスな形態に社会的メッセージを込めた作品群は国内外で評価が高

い。一九九七年より、放射線感知服《アトムスーツ》を身にまといチェルノブイリや「太陽の塔」を訪れる《アトムスーツプロジェクト》を行う。「第五福竜丸」をモチーフとした作品や、二〇一一年震災後、希望のモニュメント《サン・チャイルド》を国内外で巡回するなど、精力的に発表を続けている。

井原甲二

京都造形芸術大学・東北芸術工科大学共同研究機関「文明哲学研究所」所長、京都造形芸術大学芸術学部教授。精神文化事業に携わるビジネス展開を目指し、関連会社を数社起業したのち、一九九三年五月に月刊『MOKU』を創刊。対談ラジオ番組「ラジオ日本」「井原甲二の心の時代」、YBC山形放送「井原甲二のヒューマンネットワーク」などのパーソナリティを歴任。月刊『MOKU』主筆を務める。

—

第6回 平和文明会議 会議録

生命誌から見る文明 —生きものの視点

発行日 2014年11月1日

編集・発行者 京都造形芸術大学・東北芸術工科大学、
共同研究機関「文明哲学研究所」

京都造形芸術大学 文明哲学研究所
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
TEL 075 791 8302 FAX 075 791 8387

東北芸術工科大学 文明哲学研究所
〒990-9530 山形市上桜田3-4-5
TEL 023 627 2177 FAX 023 627 2360

印刷・製本 有限会社 修美社

デザイン 岡田将充(OMD)

*この内容を無断で使用することを禁じます。